大本教學

第二号

巻頭言……（2）
朝嵐……出口王仁三郎（5）
大本の宇宙観……出口うちまる（13）
大乗と小乗……桜井八洲雄（22）
神定聖地の神殿造営の意義……木庭次守（29）
神国の世……篠原義雄（45）
「巨旦、蘇民」両将来の意味…佐々木のぼる（58）
噴水……（73）
大本神諭と一つの主権……（79）

大本教学院編

大本教学

第二号

巻頭言

最近国内ばかりでなく海外からも、大本に対する関心がようやく深まる傾向になって来た。しかもそれが過去において一時あったような不真面目なものでなく、真剣な態度をもって究明しようとするようになったことは、喜ぶべきことである。

しかし、それだけにわれわれとしては責任を痛感せざるを得ない。この四月、京都における諸宗教センター（キリスト教関係）において、〃日本の諸宗教〃を研究している中に、関西大学講師小林栄氏の「救済宗教としての大本」と題する研究論文が掲げられている。その中で氏はこういうことを述べているのである。

「今日大本の指導者達や古い信者達の多くは、開祖や聖師の直接の感化を受けた人々であって、彼等の信仰の中で、開祖や聖師に対する追憶が重要な役割を占めているけれども、今後の若い信者にとって、信仰の拠り所は個人的追憶ではなく、大本が教える教義そのものとなるであろう。開祖の直接感化が残っている間は、弟子達は追憶の中に生きて教義を整理する必要を感じない。が、もし弟子達がその必要を感じないと云う理由で教義確立の努力を怠るとすれば、その教団の運命は弟子達と共に終ってしまう。大本は今こそ過去の追憶に生きる時代から、教義体系の確立へと大胆に移行せねばならぬ。最近発刊された〃大本教学〃は指導者達が充分に教義確立の重要性を認識し、既にそれを着々と実

行に移しつつある事を物語っているが、同誌の内容が一般信徒に理解し得る程度のものであるとは云い難い。危険はこの種神学と信徒のレベルとの差が大きくなり、信仰が個人の活ける力とならなくなる点である。既刊の聖師出口王仁三郎著〝大本の道〟等を基礎として近代的感覚と表明によりつつ教義の大衆化と紹介とに努めねばならない」

これはまことにその通りで、これに対して一言もないわけであるが、創刊号の「後記」にも記しておいたように、「本誌はひろく、信徒にまで読まれるために発行したものではなく、指導層を対象としたものである」ということを諒承しておいていただきたい。さもないと、「おほもと」誌と同じような性格の雑誌になる恐れがあるからである。

大本の教典は厖大である。これを整理体系化するということはナマやさしいことではない。それに大本の指導者達は開祖、聖師や二代教主の直接感化をうけた人々であるから、「開祖さまからこううかがった」「聖師さまがこういわれた」「二代さまがこういわれた」……ということになると、教典の上だけの研究だけでなくなるので、さらに面倒になってくる。いわゆる「如是我聞」が出てくるのである。信仰の上からいえば、教祖や教主のお言葉は片言隻句といえどもおろそかにはできない。しかし、そのお言葉も時、所、位によるものであることを理解していないと、自分がこう聞いたのであるからという理由で、いつ如何なる場合にも、それを主張されたなら大きな誤りを来すことがあるであろう。その時、その場で、その人に言われたことは、間違いのないことであっても、そのお言葉の時、所、位を考慮の中に入れることが必要である。例えば、あまりそりかえっている人には、「もっと前にこごめ」といわれるであろうし、あまりこごんでいる人には「もっとそりかえろ」と教えられる場合があるかも知れない。またあまり右に傾いている人は「左へ」と教えられ、あまり左に傾いている人には「右へ」と教えられることもあろう。それを各自が「自分はこう聞いた」

と自我を主張していたのでは、理解も和合も統一もあったものではない。

三代教主直日先生が今年の「おほもと」誌二月号に「見えざる節にむかいて」と題する一文の中で、こう述べておられる。

「私たちの中には、修行のつんだ立派な方もおられましょうが、頭だけは進んでいても精神上の年令は中学生ぐらいの人もあり、中には、保育園に通う幼児にも似た精神年令の方がかなり多いのではないでしょうか。あるいは、それ以下のよちよち歩きの方もまざっていてそれらの階層の方が、今日まで何の指導もされず、雑然とおかれていたと言えるのであります。

こうした雑然たる中で、それぞれが、ただ身魂相応に受けとってゆくということに、放任されているためどうしても耳学問ばかりが発達しています。こうして、頭ばかりが大きく、重心を失いそうになっているのが、今の私たちの姿であります。顔だけは大人の顔になっても、首から下は保育園にもゆけないようでは、親さまには、なげかれることでありましょう」

これはかなり手きびしいお言葉で、信仰は体験が必要である。本真剣な修行を経ないでは真の信仰とはいえないぞ、ということを卒直に教えられたお言葉である。

大本には教主、教主補という代々の指導者があるということが特色の一つである。大本の指導層が教主の意を体して信徒を導くようになることが何よりも望ましいのである。

朝嵐

出口王仁三郎

この歌は、昭和十七年八月七日保釈出所されたあと、第二次大本事件で入獄中に詠まれた歌を、思い出して記録された歌集〝朝嵐〟から抜粋したものである。——編者

三千歳の神の仕組の開け口いよいよ来ると雄たけぶ我なり

教御祖宣らせ給ひしまさ言の世に現はるゝ時ぞ嬉しき

世人等にそしられ又もあざけられまたほめられる生代は近し

大本はわるく言はれて後になり善くなる経綸と神は宣らせり

大本の中の出来事は悉く世界の移写と教祖は宣らせり

何事も非理法権の現代もやがては天の制罰うけなむ

東洋は言ふも更なり全地の上に騒ぎの起ることを覚りぬ

大神の宣り言果して真ならばわれ世に出てて松の世とせむ

とことはにうつらぬ松の世となれば笑顔で地上はよみがへるなり
待ちわびしみろくの神世松の世も我出づる日を元とし来らむ
わが身魂星座に囲まれ居る月日を世人のなやむ段階と知れ
艮のわが大神はかねてより大芝居すと宣りおき給へり
大芝居いよよ始まるしるしとて東の都の幕開きかな
天地の芝居いよいよ始まらむ数年間の三番叟ふみて
闇の幕続けば続くだけ長く地上の人は苦しみ悶えむ
天地の真理も法理も無視(なみ)しつゝ権利を振ふ国の司よ
我国は法治国なり法律を無視して国は治まらぬと知れ
月の座の世の立直し立替への内容ことごと不埒と強ひらる
国祖神の隠退再現記したる物語見て不都合と吠ゆ
素盞嗚尊の再現神退ひ説をこれまた不埒と強ゆる狼

有利なる資料を提出して見れど表看板保護色となじる
表裏なき教典教義を悉くカムフラジーユと強ゆる狼
問題にされたる霊界物語は皆御神諭の義解にぞある
筆先は神々教祖に懸られてしるし給ひし神言なりけり
霊界の守護神または精霊を教へ給ひし神諭筆先
御神諭は毛筋の横巾も違はぬと月座の教祖は宣らせ給ひぬ
また一つは現界人に警告を与ふるための厳の神筆
人皆を昔の神の大道に改めたまふ神諭の主意なり
善心で読めば善なり悪心で読めば怪しく見ゆる筆先
素盞嗚の神は至愛に坐しませば弥勒の神と奉称するなり
みろく神は天之御中主神天祖国祖を指し奉るなり
御中主神の霊徳完美せるを天照皇大神と白せり

地上なる神の世界の物語を現界事象と曲解なす曲
地上霊界主宰神てふ文献を捉へて又もや解らぬ事言ふ
霊界と現界の区別境域を知らざる曲の雄猛び可笑しき
国常立地上に降臨ありといふ記録は総て霊界の意義なり
盤古神は赤懸太古伝にあるを王仁が偽造のものと犬いふ
盤古とは体主霊従の代名詞に用ひし霊界物語の言
盤古神は即ち二二岐命なりと恐れ多き事を強ゆる狼
国常立尊の意義は地の上を永遠無窮に知らす事なり
国といふは世界各国の名称(なと)なり日の本のみの国にはあらず
外交上の支障を恐れて良に押込められしと思国の言なり
天孫の降臨ありし高千穂の山は何処と分らぬ事をいふ
高千穂の峯は駿河の富士山と富士の文庫に明記されあり

大地の霊力これ国常立尊なり素尊は霊体要(かね)之神は霊魂なり
以上の三神即ち大地の守護神にして何れも霊界主宰の神なり
本来の日本固有の精神になるを昔に返へすと言ふなり
神国の固有の教は治教なり既成宗教のごと狭きに非ず
厳瑞の二霊地上に顕現して世の立直し立替えをなす
霊界の世の立直し立替へを現界なりと強ゆる曲津見
霊界の立替へ済めば現界は自然に一切立替はるなり
月の座の教は政治的ならず精神改造の諭しなりけり
飢病戦は小なる三災起ると謂ひ風水火をば大三災と称ふる
飢病戦今や世界に実現し風水火の災起り初めたり
人心の改心なくば神明は大三災を起し給はむ
政治宗教芸術科学教育一切みな皇道に包含するなり

皇道を説かんとすれば止むを得ず政治教育論議するなり
月の座の政治の論議するを見て不逞の意図とするは無理なり
月の座の教理を一切政治なりと強ゆる司の無理解なるかも
来るべき世の狀態をまつぶさに警告したれば目的成りたり
御神示は一切万事実現し世人の驚く時来るべし
御神示に毛筋の横巾違はぬと神の実在証し給ひぬ
神諭はきたりきたりと実現し人の改心促かし給へり
科学的文明世界は没落し新進宗教の出づべき時機なり
日本主義モットーとして教へ行く月の御法は世を照すなり
合羽屋が合羽干したる城の馬場の天狗風をば防ぐ術なし
世界中に手を拡げたる俳優の収拾の難きに月は曇らふ
全宇宙に活機臨々弥満する力を総て神と謂ふなり

大宇宙の生命と融合する時は信悦の涙おのづから涌く
人間は天賦の使命と天職を覚り初めて生き甲斐あるなり
一切の不安と疑惧の消散するも神を信ずる力に依るなり
惟神神に真心さゝげなば不安の心は煙と消えなむ
目に耳に映ずるものは悉く神の色声歓喜の源泉
入信の時に受けたる歓びは終生忘るる能はざるらむ
信仰に徹底したる神羊に罪や穢れのあべき筈なし
月の座の教は愛と善を説けば凡ての宗教と大差はあらず
さり乍ら凡ての宣言悉く実言実行なす点勝れり
無始無終宇宙に最も善美なるものは天地と愛のみなりけり
大愛に徹する時は人群万類は歓きて神の子と靡くなり
天国の理想世界を地の上にうつしたる時皇祖生れましぬ

大亜細亜中の御国の人の祖は正哉吾勝の神に坐します
太平洋の南西島の人の祖は天菩日神の命に坐すなり
欧州の大民族は天津彦根神の御裔と定められける
阿弗利加の民族の祖は活津彦根神の御裔と神定めなる
亜米利加の民族の祖は熊野樟日神の御裔と定められける
地の上の人の悉々天照す皇大神の御裔なりける
袴は破れて朽ちてぼろぼろと収拾つかぬ闇代忌々しき
学問や理窟のみにて済むならば斯の世の政治は易きものなる
皇神の御救なくば如何にして広き現世を照らすべきかは
霊界の治まる時は地の上の世は永久に乱れざるらむ
天上の出来事必ず現界に移写するなりと月座は教ゆる
月の座のすべての出来事見てあれば来るべき世の偲ばるるなり

大本の宇宙観

出口うちまる

感謝祈願詞

大本信徒は日々の礼拝において、つぎのような「感謝祈願詞」をおとなえしています。

〝至大天球の司宰にましまして、一霊四魂、八力、三元、世、出、燃、地成、弥、凝、足、諸、血、夜出の大元霊大天主太神の大稜威をもって、無限絶対無始無終に天地万有を創造たまひ、神人をして斯かる至真至美至善之神国に安住せたまはむがために、太陽大陰大地を造り、各自至粋至醇之魂力体を賦与たまひ、また八百万天使を生成たまひて万物を愛護たまふ、その広大無辺大恩恵を尊み敬ひ恐み恐みも白す。云々〟

これは神さまにたいする感謝のことばですが、このなかに大本の宇宙観が示されています。出口聖師は大本の神示にもとづき、これを古事記と言霊学のうえから説かれていますので、その概要を述べることにしましょう。

古事記と言霊

古事記は西暦七一二年、奈良朝の元明天皇のとき、稗田阿礼が口述したものを、太安万侶が撰録してできた日

本の古典です。阿礼はただ語部(かたりべ)として語り伝えたものでばなく、神代の巻のごときは霊感によって口述したものであると、出口聖師は言われています。

言霊学とは、霊の動き、はたらきの現われであること、ば、声音などの、心、法則、はたらきなどを究め、宇宙の真理実相、宇宙に充ち満ちている道を明らかにする学であります。言霊は日本の古代より、万人におのずから体得されていたのですが、これを体系づけて言霊学とせられた近代の人としては、中村孝道、大石凝真素美の両先生をあげることができるでしょう。出口聖師はこの両先生の言霊学を素地として、霊感と言霊とによる、さらに根本的かつ発展的解明を加え、大本言霊学を大成されたのです。

天の数歌

「感謝祈願詞」のはじめにある〝至大天球〟は全大宇宙のことです。

つぎの〝ひと、ふた、み、よ、いつ、むゆ、なな、やここの、たり、もも、ち、よろづ〟は、これを天の数歌とも言い、これの言霊解が、大本の宇宙観の一面を示しているのです。

ひと（一霊四魂）

ひとは霊妙なものを意味することばで、ここでは霊のことであり、とは結び定むる言霊、また基とか、よく産み出だす意味のことばです。古事記には

〝天地の初発のとき、高天原に成りませる神の御名は天之御中主神、次に高皇産霊神、次に神皇産霊神、この三柱の神は、みな独神なりまして隠身なり〟

とあります。ここに高天原とあるのは全大宇宙のことです。古事記では宇宙の大元霊のことを、天之御中主神とよばれ、高皇産霊神、神皇産霊神とあわせて、これを造化の三神とよぶ人たちもあります。

宇宙の大元霊のことを言霊学では⊙(ス)とよんでいます。⊙なる一霊より、火と水との二つのはたらきが生ずるのです。この火と水とは、現在私たちのとりあつかってい

る火や水ではありません。言いかえれば陽と陰というほどの相対するものの意です。この火のはたらきを主とし水のはたらきを従とするのを高皇産霊神とよび、水のはたらきを主とし、火のはたらきを従とするのを神皇産霊神と申しているのです。これを図表に示せば、左のとおりです。

天之御中主神 ┬ 高皇産霊神―陽・火・霊（陽主陰従）
　　└ 神皇産霊神―陰・水・体（陰主陽従）　霊産（むすび）

右の三神は別々の神ではなく、宇宙の大元霊たる一神と、その両面にわたるはたらきにたいし、それぞれ神名を附したもので、一神に帰するのです。そして火と水のはたらきを生ずる本体をカミ（火水）とよび、水と火と相くみ、相むすんで生ずるものをイキ（水火）と言うのです。

さらにこれを詳しくいうならば、火と水のむすびによって霊的波動を生じ、霊線をなすのです。これを魂線ともいい、たましいともよびます。この魂線のはたらきがイキとなり、イキの高くあらわれたのを声（自然的声音）といい、そのはたらきとむすびの如何によって、まずアオウエイの五大父音を発し、ついでカサタナハマヤラワの九大母音を生じ、これと相むすんで、七十五声をなすのです。このように声の七十五連なるのを七十五声の言霊とよばれているのです。宇宙にはこの言霊が、造化のはたらきとともに、無限に鳴り鳴りて止どむるところがないのです。

ヨハネ伝福音書に

〃太初にことばあり、ことばは神とともにあり、ことばは神なりき、このことばは太初に神とともにあり、万の物これによりて成り、成りたるものに一つとしてこれによらで成りたるはなし、これに生命あり〃

とあります。福音書にいうことばの原語は〃ロゴス〃ですが、これを中国においては〃道〃と訳し、日本においては明治末年頃から〃言〃と訳しています。出口聖師はこのことばについて

〃神は万物普遍の霊にして言霊なり、道（ことば）なり、宇宙に充ち満つるを以って道とも言う〃

と示されています。ことばは即ち言霊であり、宇宙に充ち満つる道であると解するとき、このことばの意義が明もかになるでしょう。

火水のむすびによって生ずる魂線にはその波動に、きわめて速く鋭いものもあれば、おそく鈍いものもあります。そのはたらきの如何により、荒魂となり、和魂となり、奇魂となり、幸魂となるのです。これを四魂とよんでいます。この四魂は一霊より生ずるものであり、一霊が四魂を主宰しているのです。この一霊四魂が宇宙大元霊の本霊であり、宇宙の大本体です。この一霊を直霊と称し、これを神直日の神ともいうのです。

四魂にはまたそれぞれ直霊をそなえ、その直霊はさらに四魂をもち、このようにつぎつぎに無数の分霊を生ずるのです。その分霊における直霊は、これを大直日の神とよばれています。

要するに、ひはここにいう宇宙の大元霊たる一霊のことであり、一霊より生ずる四魂が万霊、万物をよく産みだす基となる、これをとというのです。このひとたる大元霊の一霊四魂が宇宙の原動力となって、宇宙の造化がいとなまれているのです。

ふた（八力）

ふとは進み行く言霊、吹くとか、沸騰する意であり、たは対照力、当り合う意味のことばです。

高皇産霊神たる火すなわち霊を、神霊原子とも、言霊原子ともいい、また霊素ともよんでいます。これにたいし神皇産霊神たる水すなわち体を、体素ともいいます。大宇宙の太初にあたるひとにおいては、霊素すなわち神霊原子のはたらきが主となり、つぎのふたの神業においては、体素のはたらきが積極化し、この霊素と体素のむすびによって、精気が生まれ、精気より電子ができ電気が発生して、動、静、解、凝、引、弛、合、分の八力が完成し、宇宙造化の原動力となったのです。

古事記には動力をおほとのぢの神、静力をおほとのべの神、解力をうひぢにの神、凝力をすひぢにの神、引力をいくぐひの神、弛力をつぬぐひの神、合力をおもだる

の神、分力をかしこねの神とよばれています。

要するにふたは力すなわち宇宙の活動力を意味し、その力は霊と体とのむすびによって生ずるのです。出口聖師はつぎの如き歌を示されています。

〃力とは霊と体とくみ合いてよろず力のはじめとぞなる〃

〃産霊とはよろずのものの生れ出ずる元つ御神の御魂の力よ〃

古事記には造化の三神に次いで

〃……次に国わかく浮きあぶらの如くして、くらげなすただよえるときに葦かびのごと萌えあがるものに因りて、なりませる神の御名は、うまし葦がい彦じの神

次に天之常立神、この二柱の神も独神なりまして隠身なり。

上のくだり五柱の神は別天神〃

とあります。うまし葦がい彦じの神とは、大宇宙の生命力のことであり、天之常立神は大宇宙創造の全活動力の上から⊙の神にたいし申上げた神名で、大本の神書においては、大国常立大神ととなえられています。天之御中主神、高皇産霊神、神皇産霊神の三神は、即一神であるとともに、うまし葦がい彦じの神、天之常立神、あわせて以上の五柱の神もまた即一神です。別天神というのはその他の神々とは同列でない大宇宙創造の根元神の意であり、大本神諭には、この根元神を天の御先祖さまとも示されています。なお根元神がその神徳を完全に発揮されたのを、みろくの大神とも申上げるのです。

み（三元）

みは形体具足成就の言霊であり、実とか、身、体、とか、充つるとか、三などの意です。

宇宙の活動力に根ざし、体素、霊素の数段の変化結合により、科学のいわゆる原子となり、元素となり、その中にあって霊機凝固し、剛、柔、流の三元ができたのです。この三元をみとよぶのです。

古事記には別天神に次いで、つぎの如く示されています。

〝次になりませる神の御名は国常立神、次に豊雲野神この二柱の神も独神なりまして隠身なり〟

別天神のうちの、うまし葦がい彦じの神というのは、大宇宙の生命力ですが、単に葦がい彦じの神というときは、大生命力が次第にあらわれ、火霊を宿した水、すなわち流動体をなすはたらきをいいます。これを流体といい、その魂を生魂(いくむすび)の神ともよび、天地剖判後は、これが動物の本質となるのです。

次になりませる国常立神とは、火と水抱合して固形体をなすはたらきをいいます。これを剛体といい、その魂を玉留魂(たまつめむすび)の神とよび、修理固成の根元力となって、次第にこれが鉱物の本質となるのです。

次の豊雲野尊とは、流と剛との水火合して不完全な呼吸をいとなみ、その中より柔体を発生するはたらきをいい、その魂を足魂(たるむすび)の神とよびます。やがてこれが植物の本質となるのです。この剛柔流の三元を、天の数歌ではみとよぶのですが、これによって万物を形成する霊(一霊四魂)力(八力)体(三元)の三大要素が出来たというわけです。

古事記に別天神たる五柱の神も、国常立神、豊雲野神の二神も、ともに〝独神なりまして隠身なり〟とあるのは、要するにみな独一真神に帰し、それぞれ独一真神のおはたらきの段階や一部面を示されたものであって、現身をもたれていない霊的実在神であるとの意です。

よ(世)

よは寄りむすぶ言霊で、水火の霊が与(く)む意であり、因る、依る、世などの意味をもちます。

霊力体の三大要素に因り、ここに流動体を生じ、流体の水を胞衣(えな)として、剛と流といり混り、渾沌(こんとん)たる泥海の世が現出したのです。そのときは未だ天地に立てわかれていない状態です。大本神諭に、この時代のことを次ぎの如く示されています。

〝この地の世界の初まりは、世界一体に泥海であって光も温みも何ものも無かりたぞよ。丁度たとえて言えば、おぼろ月夜の二三層倍も暗い冷い世界で、山も河

も、草木も、何一いろ無かりたのであるぞよ〃（大、八、旧一、一八）

いつ（出）

いは勢い、つは強くつづく意であり、いつとは出づるとか、稜威の意味です。

高皇産霊神より現われられた国常立神は、神皇産霊神より現われられた豊雲野神とともに、その神威を発動し神徳を発揮されて、泥海の世を次第に天と地とに立てわけられ、修理固成をされたのです。すなわち清軽なものは大空となり、重濁なものは大地となり、さらに大空には日、月、星辰を形成し、大地には山野河海が生じたのです。この天地剖判にいたる神業をいつとよばれているのです。以上、ひと、ふた、み、よ、いつの神業にそれぞれ十億年を要し、宇宙の太初より五十億年を経て、ようやく天地が剖判し、一応宇宙のあり方がととのったというわけです。

むゆ（燃）

むは結ぶ、ゆは起り行く意で、むゆとは燃ゆ、萌える意味の言霊です。

陰陽水火のむすびにより、万物に水火のはたらき益々加わり、国常立神、豊雲野神、葦がい彦じの神たちの、玉留魂（剛）、足魂（柔）、生魂（流）の活用ますます盛んになって動植物を産み出し、生成化育して遂に森羅万象の根元が確立したのです。

火の燃えるがごとく動植物うつ然として萌え出でたので、これをむゆというのです。この神業に六億年を要したと示されています。すなわち前後五十六億年を要して大宇宙、小宇宙が創造されたというわけです。

なな（地成）

ななとは地成るの意、成就とか、安息を意味します。

宇宙が創造されるとともに、大地においては、さらに修理固成の神業を進められるため、諸神霊は神人とあら

われ、国常立尊、豊雲野尊はじめ諸神人によって、地の世界の修理開発のいとなみが始められました。その後人類の発生となり、幾多の変遷を経て今日に至ったのです国常立尊の経綸により、世の立替え立直しが行われて、みろくの世を実現されるに至るまでを、地成るすなわちなのの神業とよばれ、これに七千万年を要すと示されています。大本の神書に、宇宙の太初より五十六億七千万年を経てみろくの世が出現するとあるのは、このことです。

聖書の創世記に

〃七日目に神その造りたるわざをおえたまえり、即ち其造りたるわざをおえて七日に安息たまえり。神七日を祝して、これを神聖めたまえり〃

とある七日目は、このなのの神業にあたるのです。

や～よろず

やとは弥々益々の意味であり、家とか、親の意もあります。みろくの世は世界一家のすがたであり、それがいや益々に発展することです。

ここのこは、人の霊、子々の意であり、のは伸び延びる意であり、ここのは凝りかたまる意味です。すなわち世界一家が子々孫々と繁栄し、充実し、安定に至ることです。

たりのたは多いとか大きい意であり、りは貫ぬき極まる億兆の極みの意で、たりとは足る、完成の意です。

ももは諸々の意、ちは大造化の血、また光の意です。

よろづのよは寄り結ぶ意、ろは宿り活かす意、過去、現在、未来を一如に貫ぬき保ちいる言霊、いは出づる、息、命の意、づは強く続く言霊で、よろづとは永遠につづく意味です。

要するに〃天の数歌〃は神の経綸の発展段階や、神業大成の順序を示されたものです。出口聖師はつぎの如き歌を詠まれています。

〃独神になりて隠身たもう神の上は賢き人も語り得ざらめ〃

スは⊙であり、独一真神の意です。スミキリとは住み

極まる、即ち三世常住の意です。独一真神は宇宙の太初たる過去にも坐しまし、現在も実在したまい、未来永遠にわたって大宇宙を守護したもう無限絶対無始無終の神にましますとの意です。従って如何に賢人といえども、独一真神のことは、口や筆で言いあらわし得るものではないとのことです。くわしくは別の機会にゆずるとして以上のなかにおいても、大本の神観、宇宙観の一端をうかがうことはできると思います。

大乗と小乗

桜井八洲雄

一

昭和三十三年の節分大祭における教主のお言葉の中に、こういう意味のことが述べられた。

「教団の教風にも潮のうねりに似たものがございます開祖さまの時代には真剣な精進により、小乗的には整ったものがございました。聖師さまの時代には大乗的に飛躍しましたが、一面小乗的な精進が足らなかったことはいなめませぬ。

今日の時代においては個々を充実して足もとを固めつつ、神さまのお道を絶えず拡めていくといふ、両面あいまった良き教風を高めていきますやう、皆さまと共に励んでゆきたいと念じております」

教団が「開祖の精神に強く生きる」という方針を打ち出したのも、こういうところからであった。ただここで〝大乗〟〝小乗〟ということについて再認識しておく必要があると思うのである。

〝大乗〟とか〝小乗〟とかいう言葉は、もともと仏教から出た言葉で、「法華経大講座（辞典）」によると、次のような意義である。

大乗――小乗の対。乗は乗物と云ふこと。自分を救うと共に人をも救う教を云ふ。自利々他自覚々他の円満なる道を教へる、即ち仏になることを教へるを大乗の教と云ふ。菩薩の大機が、仏果の大涅槃

を得る法門である。

小乗――大乗の対。乗は運載の義で仏の教のこと。自己の苦を脱するを目的とする法門。之に声聞と縁覚とある。声聞は苦集滅道の四諦の理を観じ、縁覚は十二因縁を観じ共に灰身滅智の空寂の涅槃に到るを目的とす。印度の上乗部、大乗部の二十分派、支那日本の倶舎宗、成実宗、律宗等は之に属す

また小林一郎氏の「法華経大講座」には、わかりやすくこう説いてある。

「その『乗』の中に大と小と別けた。これはどういう風に別けるかというと、小さい方というのは低い方で、各個人皆が自分の心の苦しみや悩みを除くことだけを目的にして学んで行く、その教を『小乗』と言う。人生は苦しい事が多い、思うに委せない事が多い。どうしたらこの苦しみが無くなるか、どうしたらこの煩悶苦悩が無くなるかというような、個人々々の苦しみ煩悶を除こうということを目的として学ぶ、そういう要求に適した事が説かれてあるのが小乗の教であります。ところが人間というものは一人で生きて居るものではない。夏になると何処でも埃の立たないように能く水を撒きます。水を撒くのに、自分の家の前だけ撒いたのでは何にもならない。自分の家の前だけ撒いたのでは、風が右の方から吹いて来ると、右隣りの家の前の埃が皆入って来る。風が左から吹いて来ると、左隣りの家の前の埃が皆入って来る。だから水を撒くというには、どうしても自分の家の前だけ撒いたのでは役に立たない。お隣りにもお向うにも奨めて一緒に撒かなければ、水を撒いた効果はありはしない。人生の事はその通りであって、自分一人が煩悶を除き、苦悩を除いて平気で居ても仕様がない。世間は複雑である。世間のあらゆる人と接触しているから、自分以外の人までも善くしてやらなければ、折角自分一人が修行をしても、その修行の効果というものは現れないまるで現れないことはありませぬが、その効果は極めて少ない。そこでどうしても吾々は自分を救うだけではいかぬ、人を救はなければならない。世の中は相持である人間というものは皆一緒に生きて居るもので、相持であ

りますから、自らを救い、人を救はなければならぬ。自分が覚るならば、他の人をも覚らせなければならぬ斯ういうことになる。

そこで『大乗』といって、本当に自分を救うと共に、人も救えるような修行をする、その教が与えられる己れを救い、人を救う、己れを完うし、人を完うする、互に救い合い、互に教へ合う、そうして人生そのものが根本から、申分のない清らかな、立派なものになる。斯ういう目的をもって説かれた教が必要になる。その教を大乗と言うので、これが大きい方の教であります。だから小乗の方は一人で救はれようという、大乗の方は多勢で一緒に救はれようという。……」

また『新言海』によると、「大乗」の項にはこう出ている。「乗は運載するものの意で、涅槃（彼岸）に運ぶ大きな乗物」（仏）釈迦の滅後、仏教団は保守派の上座部と進歩派の大衆部に分れ、旧慣を守り形式に拘泥する考えに対し、新しい解釈をもつて積極的に思想を発展させようとする気運が生じて分裂した。保守派を小乗と呼び、自らを大乗と名のった。小乗の自利的、消極的、個別的、固定的に対して、大乗は利他的、積極的、普遍的発展的で、仏教の進展は大乗思想による。——

出口聖師は、「三鏡」の中でこう示されている。

「大聖を乗せて彼岸にわたす法を大乗と云い、小人を乗せて彼岸にわたす法を小乗教というのである」

またこうも示されている。

「大本の教は大乗の教であるが、大乗教ばかりでは人を救うことはできない。たとえば、風呂をわかして入れてやると皆が非常に愉快な気持になるが、しかし風呂を沸かすには、それに先だって薪炭をととのえねば入浴の愉快が永続しない。この薪炭をととのえる小乗教の働きをもせなければならぬ」

そうすると、大本の教は大乗の教と小乗の教が兼ね備わったものであるということである。

二

さて以上のような意義からいって、開祖の教が小乗の

教で、聖師の教が大乗の教であるということがいえるかどうか、ということを考えてみなければならない。

「開祖さま、聖師さまの、どちらが小乗で、どちらが大乗などという区別はないわけでありますが、いっぱん的に、聖師さまの大乗的なお示しが、まるのみにされて自分がそれに酔わされ甘えさせられて、修行をおろそかにしているところがあります」

これは〝おほもと〟誌（昭和三十五年二月号）の「見えざる節にむかいて」と題する三代教主の一文の中に示されたお言葉である。実際、開祖の教が小乗の教で、聖師の教が大乗の教であるということは、妥当ではないのである。

大本神諭を拝読してみると、「わが身をすてても人を助ける精神にならんといかん」とか、「此大本の中から改心を致して、世界の人民の助かるやうの事を致さんと誠の道にはならんぞよ」というように、世界救済について懇々と示されている開祖の教を、ただ自己救済を目的とする『小乗教』であるといい切ることは妥当ではないまた聖師の口述になる「霊界物語」その他を拝読してみても、大乗小乗の教が兼ね備わっていることは明かである。

ただ開祖の時代には、体的な真剣な精進というか、修行というか、自己完成にむかう努力が実践されていたということであるから、そういう意味では、その時代の信仰は〝小乗的〟であったということはいえるかも知れない。しかし、開祖の教が決して小乗の教ではないのである。

三代教主のお示しは、その自己完成にむかう真剣な精進、修行を通して実践されなければ、ただ口先きで〝世界平和〟だの、〝みろくの世〟だのと叫んでいたところで、何にもならないではないか、ということであろうと思う。

三

出口日出麿先生は、「神霊との和合」（信仰叢話）の中に、このように示されている。

「本当の神さまとの真釣合せ、融合ということも、決してただ時を定め形式をきめて、それによって拝むことにのみよって得られるのでなくして、真のまつりは常住坐臥、二六時中行われるべきものであります。

中には、自分は何年来信仰にはいって祭りを大分やったが、チットもおかげがないというようなことをいう人があるが、それは本当のまつりをやっているのではないそんなことをせんでも、二六時中、神を念じ神にかなうような行動をしている人は、それがまつりをしている人である。それが根本である。大事である、平素にある、ということはおわかりと思います。

しかしながら、初めから対象なしに、形式なしに、戒律なしに、そういう小乗的境地を通らずに、直ぐに真のまつりが出来るという人は、それは天才的な人か特別の人でなければ、むつかしいのであります。先生につかずに文字がわかり、学問が解るという人は特別な人でありまして、普通は型からはいる、形式からはいる。その方が要領が呑み込みやすい。そこに神壇を設ける、宝座を造る、神さまのお在でになるところを造るということは何も造らずに拝むよりも自然であり、気持がそういう気になりやすい。

神さまはどこにもおられる方であるから、何もそういうことはしなくても良いようにいう人があるかも知れませんが、やはり相対的にそういう物を造る、神さまに対する呼鈴をつくり窓口をつくる、その方がしっくりくる寝ころんで拝んでもまつりをしていることになるというが、それは余ほど大乗的な人、そういう態度でも念力がとどくような情態になり得る人ならばよいが、やはり一般には像なり宮なりを対象にした方が本当である。またそういうことをすれば、その宮なり像なりに霊気の一部がとどまって来る。……」

三代教主は、開祖、聖師の二大教祖によって成れる大本の道統をうけついで、これを永遠に伝えられ基礎を確立し、いわゆる〝水晶の世〟のはじまりの大本教主として報身ミロクの働きをされることは、大本神諭に明かに示されている。ただここで取りちがいしてはならぬ大

事なことが聖師、二代教主より訓示されているのである。（暁の鳥参照）

「〝三代の世になれば水晶の世になる〟という神諭を取違いしてはならぬ。三代教主が表に立てば直ぐにも水晶の世になると思うのは大間違いである。水晶の世となしてこれを三代教主に渡すのが、定められたる神誓神約である。若し然らずして三代の徳を傷つくるようなことがあっては、ミロク御神業に大支障を来たして、神様に申訳なきことになるから大本人はこれを心得て貰いたい」

現代が報身ミロクの神業の段階に入ったということは口と心と行の三つそろうたまことを実践すべき時期であるということである。

神を愛するということは、神の意志を愛するということである。神の意志とは用ということである。われわれは一人々々が各自小なる形式の高天原であり、大神人の一細胞であることを自覚せねばならない。一つの細胞は全身に影響を及ぼすのである。全身の一部に不健全な細胞ができるときは、白血球は直ちに熱をおこしてこれを全癒せしめようとするのである。指の先きに膿がたまっても、神経にさわってその晩やすむことができないのである。万有一体観に立てば、自分の言、心、行はことごとく全大宇宙に影響をもっているのである。

いと小さき人間なれどたましひは
全大宇宙に感応するなり（大本の道より）

われわれの「言葉」が、全宇宙に響いていることはラジオの発明によって証明されている。われわれの「想念」「行為」ことごとく影響しているのである。

この言、心、行が神の意志（用）にかなうように使用されれば、神を愛するということになるのである。御用に立つのである。

「役員は皆そろうて、いままでの見苦しき心をすてて和合いたして、世界の掃除のもとの威勢を出して下されよ、（明治三十四年旧二月二十四日）」――「口先ばかりの誠は嘘であるから、実地正末の行為を致して皆和合して御用に掛らんと、世界の事が永びくぞよ。（大正五年旧十一月二十一日）」

大本人は各自「自己」の自覚を深く掘り下げて、報身のハタラキをすることが要請されている。「愛国」心は誰でももっているが、それが「報国」にならねば実践されたものとはいえないのである。

報身ミロクとは言心行一致、霊体一致のまことのハタラキがあらわれることである。

聖師の譬えに従えば、風呂を沸かすには、まず薪炭をととのえねばならない。薪炭は人材がそろわねばならない。それがバラバラでは火力が弱い。団結してはじめて愛善の火が燃えるのである。社会の構成もただ外部の形ばかり真似ても何にもならないのである。形は同じでも一つの部屋は電燈の光がともり、電熱が通っている温い部屋であり、今一つの部屋は暗黒で冷い部屋である。愛（熱）と信（光）によって結ばれていない世界はミロクの世では断じてない。

大本は世界改造の枢軸となる処であることを、心に銘記しておかねばならない。（完）

神定聖地の神殿造営の意義

木庭次守

一、大真人

みろく神政成就については、幾多の重要なる条件があるが、なかんずく、絶対条件の一つに、大地球上の最尊最貴の地点に、天地創造の大神の大神殿の建造がある。大本開祖の御神諭には、「国常立尊は出口直に始めてお給仕をして祭って貰うた」と示されてあるが、神のごとき大人格者の誠心誠意の奉仕によらなければ、大地球の先祖国常立尊の神霊を招ぎ祭ることは、出来ないのである大本開祖はまさしく、この神に選まれた大真人であったわけである。この人の誠の祈りによって、地球創造の神霊を感応せしめたのである。出口聖師が「神政復古の本義」の文中で、

現代は祭の大本義が全く顚覆して祭事の廃絶したる世とも謂ふべく、悪魔は白日に横行して神権悉く蹂躙せられたる常闇の世とも謂ふべく、国の常立の神威の天之岩戸隠れの乱世とも謂ふべき次第であります。祭は神人をして合致せしむるものであります。祭るものは即ち祭らるる神であります。現代の暗黒世界には祭るの人が無いのでありますから、況んや祭らるる神の在し給ふべきや。天国の民は天業を事と為し、一挙一動、坐止動作常に神業たる事を離れないのであります。

と述べられてある。祭るの人こそ、大本開祖その人であ

ったわけである。この人の出現によりて、次第々々に、神定の聖地綾部に、正しき神々が神集いたまうこととなり、遂には天来の救世主、出口王仁三郎聖師を招きよせられたのである。それより引続き道統の正しき継承者によりてこの重大なる神事の行なわるるについては、大祓祝詞（大本にては神言）の明文にしるされたる通り、また大本神諭の明示するように、東と西の聖地に、神様の公園いわゆる神苑を開き、宇宙創造の神の大神殿の建造されることが絶対の条件なのである。

◎神　言

高天原に神つまります、大天主太神の命もちて、八百万の神たちを神集へに集へたまひ、神議りに議りたまひて、伊都の大神、美都の大神は豊葦原の水穂の国を、安国と平けく所知食さむと天降りたまひきかく天降りたまひし四方の国中に荒振神たちをば、神問しに問したまひ、神掃ひに掃ひたまひて、語問し磐根樹根立草の片葉をも語止めて、天之磐座放ち天之八重雲を伊都の千別に千別て天降りたまひき。かく天降りたまひし四方の国中を、安国と定め奉りて、下津磐根に宮柱太敷立て、高天原に千木多加知りて、皇大神の美頭の御舎仕へ奉りて、天の御蔭日の御蔭と隠りまして、安国と平けく所知食さむ……

◎略　解

天祖の御依托によりて、救世主が御降臨遊ばさるるに就いては、宇宙の中心、世界の中心たる国土を以て、宇内経綸の中府と定め給ひ、天地創造の際から特別製に造り上げてある、神定の霊域に、崇厳無比の神殿を御造営遊ばされ、惟神の大道を宣布される事になる。神諭の所謂「神国の行ひを、世界へ手本に出して、万古末代動かぬ神の世で、三千世界の陸地の上を守護」さるるのである。それに就いては直接天津神の手足となり、肱股となりて、活動せねばならぬ責任が重い。

◎大本神諭　（火の巻三四五頁）

大正六年十月十六日

二度目の世の立替の、艮めを刺すのが近う成りて来たぞよ。何も経綸通りに致すぞよ。西と東とに初発の御宮を建て戴いて、元の昔へ世を戻す時節が参りて来たから、大神が揃うて元の神宮へ立帰りて、神代に立替るから、何事に付けても大望斗りであるぞよ。世の終の艮めと、世の始りとの境の筆先であるぞよ。余り大望な御用であるから、三体の大神が西と東の新宮に降り昇りを成されて、天からの御手伝をなさる実地が、歴々と出口直の眼には見えるぞよ。（中略）

金竜界の神島に御宮を建て下さりて、三体の大神様に御鎮りに成りて貰うて、結構であるなれど、モ一段上に上りて守護を致して、本宮山に御宮を建て、三体の大神さまが御鎮りに御成りなされたら、地の先祖が神島（一名大八洲）の御宮へ鎮りて、天のミロク様と地の先祖とが、末代の世を持ちて治めて行かねば、外の神魂では、末代の世は続いては行かんこの世であるぞよ。

二、西と東の宮

神諭にいうところの西と東の宮は、大正の初期までは綾部の大本の神苑内に、西石の宮と東石の宮がつくられて、ここに天地創造の神々が昇降されると教えられていたが、亀岡が大本の聖地となってからは、綾部が西の宮（地上の天国）、亀岡が東の宮（地上の霊国）と教えられたのである。しかし大本は、すべてに実地と雛型を出すところであって、綾部の神苑内に、西と東の石の宮があることが、日本的には、亀岡と綾部の両聖地のこととなりついで世界的には、田庭の国（丹波、丹後、但馬）また日本国を東の聖地として、西の聖地がエルサレムとなることを教示されている。この両地点に、新しき神殿が造営され、大神の神教によりて万教が生かされるようになることを示されているのである。以上のごとく、神示の上から考えてくると、大本（綾部）、日本、世界の三段の型

が、いな事実が実現するときが、みろく神聖の実現の暁である。亀岡の神苑に、最奥霊国の地上移写であった月宮殿という石の宮を、昭和三年に建造されたことは、まったく日本における東の石の宮であり、宇宙の主神の神教を伝達する地上唯一の霊国となったわけである。

三、仮の宮

しかし、ここで一つ考えねばならないことは、神諭によって、大本では「二度目の立替」であって、一度目は必ずくずれ、二度目に完成するものと信じていることである。大本神諭にも、「地の高天原（綾部の神苑）に仮のお宮を立てて」と示されていることである。

第一次の大本事件では、綾部の本宮山上に信者の真心の結集によって造営された、天の御三体の大神の瑞の御舎が、大正十年にようやく完成するやいなや、当局の無茶な弾圧と取りこわしを受けて、姿を消したのである。神明の慧眼には恐れ入るの外はないのである。しかしこの事件は、そのまま三千世界の立替立直しの開始の宣言であり、同時に神界の経綸の大躍進であったのである。

◎霊界物語　（第一巻）

第十八章　霊界の情勢

そこで天よりは事態容易ならずとして、御三体の大神が地上に降臨ましまして、国常立尊の御経綸を加勢なし給ふことになり、国常立尊は仮の御息所（おやすみどころ）を蓮華台上に建設して、御三体の大神様を奉迎し給ふこととなるのである。

随って、御三体の大神様の御息所が出来たならば、神界の御経綸が一層進んだ証拠だと拝察することが出来る。

四、神殿の破壊

昭和二年五月十七日に第一次大本事件が免訴によりて晴天白日となるや、かねて出口聖師の満五十六才七カ月をみているようとの予言が実現期に入って、昭和三年よりは、亀岡も綾部もあげて、聖地の完成を期して、神殿もぞくぞくと建造されて行ったのである。両聖地の敷地

を建物が埋めるようになったのであるが、第二次事件によって、本部は元より地方の建物まで取りこわされてしまったのである。これによって、亀岡、綾部の両聖地の神殿はことごとく破壊されて、土地は強制的に両町役場に売却させられてしまったのである。

この建物建設中に、出口聖師が「あまり丈夫につくったら壊すのが大変だ」（月宮殿）と述べられ、信者が「尾州桧でつくらずに、台湾桧でお造りになりますか」（透明殿）と質問すると、「二十年もったらよいがな」と教えられたことがあるが、破壊されたときに、今さらのごとくその先見の明に驚いたのである。

出口聖師は、未決の中から「早く大本の土地を取返さぬと、日本は今に大本の通りになる。土地を占領されたように、占領される」と述べられたが、この言葉は、昭和十六年から大東亜戦争中に的中しているのである。日本は大本の聖地の状態と同じように破壊されたし、連合軍より占領されるに至ったのである。大本の神殿のダイナマイトによる破壊は、はからずも伊勢神宮の爆弾投下によって実現しているのである。

神様のお宮が、神聖な土地に荘厳美麗に造営されて、神徳が光被するときこそ、地上天国の実現であると、七十年の大本の出来事を回顧して、しみじみと思うものである。

五、地上天国

神定の霊域である日本国の、真秀良場であるタニハの国（丹波、丹後、但馬）の聖場である綾部と亀岡の神聖地域の中に、人類の真心の結晶によって、大神様の大神殿が建造されて、人類が真心をもって奉仕しまっるときにこそ、「うれしうれしのしおれぬ誠の花の咲く」「笑いのとまらぬ仕組の実現」の五六七の世が地上に降るのである。教の上からは万教同根の真理が実現し、千木高知るときこそ、三千年間人類の待望した、神政成就の暁であろうと思う。

神々も人類も等しく、真の神様の教を実生活の上に行うときが、松の世、水晶の世である。

順序としては、第一に神教に帰順し信仰して、第二に麻柱（あなない）の誠をもって、神殿造営に仕えまつることになるのである。

直言すれば、大神の神教によって、神々をはじめ人類の霊魂も肉体をも、根本的に教化する、亀岡の地上霊国の完成である。それによって宣伝使の養成をはかり、亀岡大道場の真面目を発揮してゆくことが第一の目標である。

天国に上る身魂は必ずや
月の霊国階段を踏む
蓮華台千代の乳房と定めつつ
世人を恵ます伊都能売の神

と神歌をもって示されたごとく、大本の特長は、二大教祖も二大聖地も二大教典も、天国的のものと、霊国的のものが併存するが、あらゆるもの（思想、宗教、学説等）と根本的に相違する点である。

故に、神殿の造営は、綾部に地上天国的の大神の神殿が造営され、亀岡に霊国的神殿が建立されることが大切で、順序によりいえば、天人養成の場である、亀岡聖地の完備が先決である。

特に霊界物語に明示されたように、大本の教を「三五の月の教」（即ち霊国の教）というのであるが、今までのあらゆる宗教が、極めて天国的であるのに反して、大本の教は根本的に神智の具現ともいうべき霊国の教なのである。大本が、二度の大弾圧にもめげずに、二世三世とつづき、しかもその都度拡大しつつあるのは、草薙の剣ともいうべき、大本の霊国の教説に真の生命があるからである。

後前（あとさき）にいえば、まずは救いの聖場である亀岡の態勢を定め、ついでお礼参りに全人類のきびすを接すべき、綾部の聖地が完成することが大切なことである。その故は霊国の完成なくしては、天国の意義そのものがなくなってしまうからである。

◎神政復古の本義

（大正五年四月十一日）

神政復古の唱導者を、地球の中心（地質学上）日本

神国の中心なる下津磐根の丹波国綾部本宮の里に出せしは、実に太古よりの神誓神約の在し玉ひし事と恐察し奉るのであります。

草薙神剣（艮の稜威）は今や万教を裁断せむが為にこの霊地に降りましたのであります。治乱興廃、得失存亡、動止進退、安危閑争は神剣の御本質であります。

神政の魁として神剣の威力を万教の上に施し、大日本国の下津磐根に大宮柱太しく立て高天原に千木高知るべき大祭殿の建造されまして、天津日嗣の大経綸の発現すべき時、世界万民は互に兄弟手を差し交して遠津御神に謝し奉り、草木を始め鳥獣虫魚の類に至るまで一つとして、其天賦に安住せざるもの有るなく、天神地祇の末を正して其祭を営み玉ふべきこととなるのであります。万教が惟神の大道に帰して神政永へに成就すべき日を見むこと、何の楽しみか之に過ぎんやであります。何の喜びか之に過ぎんやであります。吾人の所志は飽くまでも斯の通であります。慨世憂国の志士仁人は互に起って吾人と行動を共にし、大義名分に向って努力せなければ成らぬ訳ではありますまいか。ア、之に過ぎたる日本国民の義務がありませうか。

◎霊界物語　（第四十九巻）

第一章　地上天国

天地万有一切を愛の善と信の真に基いて、創造し玉ひし皇大神を奉斎したる宮殿の御舎を、地上の天国と云ふ。而して大神の仁慈と智慧の教を宣べ伝ふる聖地を霊国といふ。故に大本神諭にも、綾の聖地を地の高天原と名付けられたのである。

天国とは決して人間の想像する如き、宙空の世界ではない。大空に照り輝く日月星辰も皆地球を中心とし、根拠として創造されたものである以上は、所謂吾人の住居する大地は霊国天国でなければならぬ。人間は其肉体を地上において発育せしめ、且其精霊をも馴化し、薫陶し、発育せしむべきものである。而して高天原の真の密意を究むるならば最奥第一の

天国も亦中間天国、下層天国も、霊国もすべて地上に実在する事は勿論である。只形体を脱出したる人の本体即ち精霊の住居する世界を霊界と云ひ、物質的形体を有する人間の住む所を現界といふに過ぎない（中略）

要するに忌憚なく言えば、高天原とは大神や天人共の住所なる霊界を指し、霊国とは神の教を伝ふる宣伝使の集まる所を言ひ、又其教を聞く所を天国又は霊国といふのである。而して天国の天人団体に入りし者は、祭祀をのみ事とし、霊国の天人は神の教を伝ふるを以て神聖なる業務となすのである。故に最勝最貴の智慧証覚に仍って、神教を伝ふる所を第一霊国と云ひ、又最高最妙の愛善と智慧証覚を得たる者の集まる霊場を最高天国といふのである。故に現幽一致と称へるのである（中略）

綾の聖地を以て天地創造の大神の永久に鎮まります最奥天国の中心と覚り得る者は、死後必ず天国の住民となり得る身魂である。故に斯かる天的人間は聖地の安危と盛否を以て、吾身体と見做し、能く神界の為に、愛と信とを捧ぐるものである。

主神の愛善の内流を受ける心臓の上にある左の乳房は地上の最高天国である本宮山（鶴山）を中核とする綾部の聖地であり、信真の内流を受ける肺臓の上にある右の乳房は、地上の最奥霊国の具現である亀山を中心とする天恩郷の聖地である。この両聖地の両乳房より、こんこんとたえず湧きつつある宇宙創造神の、愛善と信真の大光明と生命の真清水によりて、神々も全人類も霊肉ともに根本的に救済されることが出来るのである。特に、神代の宣伝使たちが、神教宣布の際に、綾部からわざわざ亀山の月宮殿と高熊山に参拝して出発する理由を、よくよく考慮すべきである。

鶴山と亀山聖地を踏まざれば
来るべき世はしのがれざるべし

主神の愛の乳房である鶴山、亀岡の両聖地に神殿を造営することは、あたかも母の懐中に安らかに嬰幼児がいだかれるために、母に衣装を着せ、または乳瓶を用意す

るにひとしいことである。神殿も教典も奉仕者も一切が母神の母乳を、安易に人類にあたえる機関に過ぎないのである。両聖地の建設は救世教大本としての絶対的条件の一つであることは、言をまたない。

両聖地も神殿も建造物も教典一切も、すべて救いの方舟である。

綾部の長生殿や亀岡の万祥殿について、左のごとき聖師のお歌があるのは、必然のことである。

◎「神の国」誌

（昭和十年十月号「言華」）

花明山に万祥殿の建つ時は
　わが大本の道輝かむ
神勅の万祥殿の大工事
　おくれて天地に申訳なき
申訳なけれど〇〇とぼしさに
　心いらだつばかりなりけり
いたづらに敷地の上にコスモスの
　群り生ふる狀の淋しき
コスモスをなぎはらひつつ生誕祭
　露天の下に行ひにけり
神定の期日なりせば露天にて
　是非なく祭典行ひにけり
今日よりは宣伝旅行廃止して
　教殿工事にいそしまむと思ふ
ただ一人心なやます今日の吾を
　助けむ人のなきやと求むる
鶴山の宮こはたれし其日より
　早や十五年経ちにけらしな
こはたれしその日を卜して此秋を
　長生殿の斧始めせむ
長生殿建ち上りたるあかつきは
　神の経綸も漸く成らむ

◎「神の国」誌

（昭和十年十二月号「言華」）

大神の鎮まり給ふ大宮の
　成らずば神業成らざるを知れ

六、神殿建造の順序

(イ)本部の神殿

大地球の御先祖、国常立大神ほど敬神を実行される神様はないので、大義名分そのものの神様であります。大正時代のみろく殿の神殿至聖殿には、天の御三体の大神様を奉斎し、この度の三千世界の大改造に奉仕した神々様をお宮におしずめさせて頂いてからでないと、国常立尊はお宮には鎮座されないのである。

本末を明らかにし、枝葉の間をただすことが水晶世界のために重要事項である。出口聖師は綾部、亀岡の聖地に、沢山の建物が建てられたのに、その末期に小さい瑞月舎という小家屋をつくりて、ここが私の住居であると始めて述べられたのである。神の道はまず敬神からはじめることを、国常立尊の神示と聖師の行動によって悟らして頂くことができる。

◎随感録（第三章）

至聖殿落成所感（三〇頁）

（神霊界大正九年九月二十一日号発表）

御筆先に「艮の金神が世に出て覇張るのではないぞよ」斯う言ふ神勅があります。兎に角、御三体の大神様のお宮を建てて立派にお祭をし更に餓鬼虫族迄助けて、その上で艮の金神の御宮を建てて貰ふと云ふ事を仰せられて居るのであります。それで御神勅に依りまして、金竜海の中に大八洲の御宮を建て、小さい御宮も段々出来ましたが、国常立尊様は鎮まってはおいでになりません。

国常立尊様は先ず第一に御三体のお宮を建て、さうして天の神の御降臨を仰いで、この世界の経綸をなされるのでありまして、謂はば国常立尊様は神界の教祖で、神界の秘事を洩らし、或は神界の御経綸を御自分で引受けなさる所の神様であります。詰り神界と現界とは合致したものでありますから、御三体の神様がお下りになるに就いては、社がなければど

うしても鎮まって戴く事は出来ませぬ。この地上が実に昔の儘の綺麗な世の中であったならば、御宮は無くとも何処へでも神様は御下りになる訳であります。神様は実に有る所無きが如く、無き所無きが如しで、何処にでも神霊は充満して在る。我々も自分のお世話になった人、或は自分の主人であるとか、目上の人がお出でになったならば、座敷の一つも掃除をし、或は経済の許す人は新築して、来て貰ふのであって、御宮を建てると云ふことも、それと同じである。最も尊いこの上高い所はないと云ふ神様に此地上に御降臨を乞ふのであるから、艮の金神様も自分の宮は何処でも宜い、何でも宜いと仰せられて居ります。それよりも御三体の神様の御宮を建てゝその外立替の御用をなさった神様、すべて御力を添へ下さった神様に御礼の為に御祭りすると云ふことが書いてあります。神様からして敬神の大道を実行なさって居られるのであります。

神殿造営の順序は、まず前述のごとく、神様のお宮としては、天系、霊系、君系、父系の神様から始めることが、神界の不文律である。

第二次大本事件中に、綾部の熊野神社の藁葺の屋根がほとんど腐っていたので、葺替えの御用をしていた材木屋の人の特志で、一層のこと新築したらとの献納話があった際に、聖師様は「大神様のお宮がないのに、産土様のお宮をたてても、神様は鎮座されない」と警告されたので、新築はやめて、屋根葺きだけしたことがある。神様の世界は実に礼儀正しい世界であることを、奉仕する人々はよくよく理解して従事しなければならない。

(1) 長生殿の謎

昭和十年出口聖師が本宮山上に、いよいよ天の御三体の大神様の御神殿である、「長生殿」建設に着手されることになった折りのことである。

佐世保の山県猛彦氏が、全工費五十六万七千円を、出口聖師におとどけされると、「貴下が神様にお供して下さい」とのお言葉に従って、穹天閣の神床に三宝に金品

をのせてお供えし、いよいよ礼拝して拍手せんとするやにわかに三宝がヒックリかえって、拍手することが出来なかった。繰返し繰返して何回となく礼拝して、拍手せんとしても拍手せぬうちに、三宝がヒックリかえって、どうしても拍手が出来ないので、そのことを聖師様に申し上げたところ、「神様のお宮は一人で御用すべきものではなく、全部で御用すべきものである」と、お諭しになったのである。大本における神様のお宮の御用はまったく神秘そのものである。

(2) 国常立尊の宮

前掲の文献によって、天の大神様のお宮は、その位置が綾部市の本宮山上であることが分った。国常立尊のお宮の位置は何処かと、大本の教典をひもといてみると、照山と桶伏山の山間であることが明らかとなるはずである。

◎霊界物語　(第二〇巻)

第一章　武志の宮

言依別命は、神素盞嗚大神の命を奉じ、照山と桶伏山の山間に、国治立の大神、豊国姫の大神の、貴の御舎を仕へまつりて、其威霊を鎮祭し、玉照彦、玉照姫の神をして宮仕へとなし、世界経綸の神業の基礎を樹立せんとしたまひ、遠近の山野の木を伐り瑞の御舎を仕へまつった。神人等の道を思ひ、世を思ふ真心凝結して、荘厳無比の瑞の御舎は瞬く中に建造された。称して錦の宮と云ふ。

◎神　諭　(「神霊界」誌大正八年三月十五日)

大正八年三月八日

本宮山の空(註=空は頂上の意)に三体の大神様の御宮が立ちたら次の中段の所へ国常立之尊の宮を建て、坤の金神の御宮を阿奈太(あなほ)に建て、日の出の神の宮をも立てて、天下泰平に世を治めたなれば、跡は七福神の楽遊びと成るぞよ。そうなる迄に此の大本は世界の守護神が沢山寄りて来るから、余程確り身魂を研いて、日本魂に立帰りて居らんと、耻かしき

事が出来いたすぞよ。チョロコイ身魂では能う堪らんぞよ。それで何時も腹帯を確り締て居らぬと、弥弥の時になりて神徳を取り外づすから、至仁至愛の神心に成りて下されと、クドウ気を附けたのであるぞよ。鳥も通はぬ山中の一つ家、出口の神屋敷に、八百万の神が澄きりて、神の都を築く世界の大本、地の高天原であるから、世界の人民の思ひとは雲泥万転の相違であるぞよ。丹福隣県の綾部の本宮山の山中に、国常立之尊の一つ屋を建て、神の都と致すに付いて、弥々天地の守護神人民が尻曳き捲り、東奔西走の結果、旧正月二十五日に弥々大本の支配と成りたのも、昔から定まりた日限であるぞよ。里の童が尻捲りはやった、今日は二十五日と申して尻を捲って走り遊ぶのは、今度の五六七の大神の御宮の地場が神の手に入る神示であるぞよ。一度に開く梅の花と申して在るのも、此二十五日に因縁あるぞよ管公の祭礼は二十五日、梅は定紋なり、二月は梅の開く月、其月の二十五日にはカミから此の大本の教や行り方を取調べに参りたのも、神徳発揚の守護であるぞよ。旧二月の十日いよいよ本宮山がカミの手続を終り、天晴れ神界の経綸の土台が出来上り、三月八日には遠劫より旭昇石が納まりたのも、弥々神威発揚の瑞徴であるぞよ。

(ロ) 本部と地方の神殿

神様としては、神殿はまず本部を充実して、本部の神殿や建物が完備した上で、世界の立直しがすんだあと、地方にそれぞれお宮を建てさせて頂くのが、神的順序である。

第二次事件解決の直後、九州別院再建の熱意が盛り上がり、いよいよ着手しようとしたとき、聖師様から「本部が建設されないうちに地方に建てることはいけないから、鶴鳴殿の建設だけ許すことにする」と申されたので聖師様の居館として建てられていた鶴鳴殿を再建し、水明舘と命名された。

「本切れて末続くとは思うなよ、本が枯れたら末は続

かんぞよ」との神諭は、神殿造営の際にも厳守すべき重要事である。

◎大本神諭　火の巻（四四五頁）

大正七年旧十月二十九日

世の立直が済みたら、国々所々に大本の御宮を立て夫れ夫れの守護を鎮めて御用を致さすから、それ迄は御宮形も建てられんぞよ。広間も大本の仕組が成就いたして、天下泰平に世が治まる迄は、新らしう建てる事は出来ぬぞよ。今迄に鏡が出してあらうがな。京都で新に広間を立て神から潰され、伏見に建てまたその通り、肝川に建てても役に立つまいがな大本の根本のきまらぬ中に、守護神人民が勝手に致した事は、九分九厘で覆りて了ふぞよと、何時も筆先で気が附けてありたなれど、神の申す事に背いて致した事は、何遍でも後戻り斗り致すぞよ。大本を次に致して、園部で広間を建ようと致して、材木を寄せてサア是から建前と言ふやうに成りた所で、俄の大雨で材木が影も形も無いやうに、流れた事があらうがな。皆神界から善悪の鏡が出して、大本の中に実地が見せてあらうがな。明治二十五年から、幹退けて末続くとは思ふなよ。幹ありての枝もあれば末もあるぞよ。幹退きたら末は枯れるぞと申して、出口直の手で毎度気が附けてあるぞよ。

明治二十五年から申した事は、何時になりても毛筋の横巾も違はん事ばかりであるぞよ。

人体にたとゆれば、世界の心臓部は地上の高天原であるところの綾部の聖地であり、肺臓部は地上の霊国であるところの亀岡の聖地であり、心臓と肺臓が健全になれば、全体が健康になるように、まず両聖地の完成、なかんずく神殿の造営、教典の刊行こそ、第一に実現すべきことである。

神霊世界は主神の大宮殿を中心として、神格によりて構成されているように、聖地が完備したのちに、次第に地方に神苑が築かれ、神殿や建物が建設されゆくことがみろくの世実現の正しき道である。

(ハ) 大本信徒の任務

今日は、大まかにいえば、世界の立替えの最中であるが、二代教主は「立替えの間は、御苦労ですが大本信者が御用して下さい。立直しになったら、世界中から出て来て御用をするようになるから……」と、教えられているのである。

みろくの世の根本の経綸であるところの神教護持（綾部）および神教宣布（亀岡）の御用は、われわれ大本信徒が、無上の光栄として歓喜勇躍して御用すべき、千載一遇のありがたき御用であることをよく理解して、つくさせて頂きたいものである。

七、神剣発動

みろくの世とは即賞即罰の世で、神様のいわゆる「家の戸締りもせいでもよきように致して、人民を穏かに致さして、喧嘩もなき結構な神世に致して、天地の神々様へ御目にかけて、末代つづかす松の世と致すぞよ」の実現である。

地球上の最尊最貴の聖場、鶴山、亀山を中心とする地の高天原を大祭壇として、真実の祭祀の行われるときに神権発動して、完全無欠の至仁至愛の世が、地上に顕現するのであるから、両聖地を清きた上にも清め、天国と霊国の姿を完全に具現して、宇宙の祭祀の大聖壇たる条件を完備するように、大本信徒は、打って一丸となり、御奉仕させて頂かねばならない。

◎出口王仁三郎全集　（第二巻）

神政復古の本義（三八三頁）

蓋し草薙神剣は天地万有の定理を示させ給ふ神律神法でありまして、神剣の在ますところ必ず権威之に伴ひ、正邪真偽立どころに裁断を受けないものは無いのであります。即ち神剣の権威に従ふものは栄え神剣の権威に触るものは必ず亡ぶのであります。神剣の権威を世に示して神剣の権威を奉戴し奉る、之を此れ祭政一致の本義と名づくるのであります。古今東西の学者は多くこの祭政一致の本義を弁へず、

神を祭る事と世を治むるの政治とを二つにして、曲解誤伝大に神国の大本源を闇ましつつありますのは実に浩歎の至りであります。祭とは真釣の意義であります。天地の経綸神法の権威を遵奉して地上の政道を、悉く天道に真釣合はすべきを申すのであります。

創刊号正誤表

（増刷りの場合）

頁	段	行	誤	正
8	下	18	昭和	明治
34	上	6	本当に	本当には
38	下	1	におよび	および
40	下	17	二七年	二十七年
43	下	5,6		抹消
44	上	4	教道	教導
44	上	4	雛形	雛型
45	下	3	とこなし	ことなし

神国の世

開祖の神諭から観た大本の教理

篠原義雄

氏はかって文部省宗務課長の要職にあり、退任後、大本教学院の嘱託となって、教義の研鑽に専念していたが、本年三月、天恵郷で急逝された。

これは氏の遺稿の一つである。

―編者―

時点の問題

「艮の金神の世、神国の世になりたぞよ」、「元の昔の神代に復すぞよ」等の神の言葉が示されている。

明治二十五年正月の初発の神諭の時において既に「神国の世」になったのであった。そのように神の告知がなされたのであった。そしてその「神国の世」は、隠された目にもせず耳にもしなかった神国の世、即ち、神の思惑、意図の内にある将来の理想図としての神国の世を誰しも予想する。その将来現出されるであろう想像の世界が、いわゆる「神国の世」とするならば、なにか厳しい歴史との関係において、文化の進歩を基盤にしての人工による理想世界が現出されるように考えられてくる。しかし、神諭はこれに反し明らかに「元の昔の神代」といい

この「昔」「元」に返し、戻すといい、また「神代に復す」と記している。すでにすでに在った過去の「神代」が、ふたたび将来に復され、戻されるというのである。ここに、時の初まりにおける「神代」と、時の終りともいうべき将来の「神国の世」の二つの時点と、その間の経緯が、今やわれわれの目前に開示された。明瞭に示された初めと終りの時点、その時点は「神代」といい、「神国の世」という表現において「戻し」「返す」「復す」の言葉によって結ばれ、関係づけられている。「戻し」「返す」、または「復す」の字義が示すように、その両時点の内容の「神代」と「神国の世」は、何等かの共通性を同類性を感ぜしめている。しかも、すでにすでに約七十年前の明治二十五年に「神国の世になった」のである。理解に苦しむ幾多の問題が包蔵されている神の言葉である。

しかしただ、神の言葉という厳粛性において、すでに「神国の世となった」という事実は、如何ともいたし得ざるところで、問題は、ここから起り、ここに終る以外あり得ないのである。神の言葉として「神国の世となった」というこの事実性を中心として、すべての理解は解明されなければならないのである。

この点に関し、類似の他の啓示宗教の例に比して考えて見よう。それによれば、「神の国」は近づいた、いつかは知れないが、将来の時点に初めて「神の国」が出現するとの啓示である。この神の国は、前述のような昔の元の神代といった既往の神の国との関係を全然もたない初めて新しく出現する神の国についての記事である。それはまた、世の終末において出現されるといっている。歴史の創造に相応して、歴史の終末において生起する神の事柄といっている。歴史の始点としての神の創造の事実と世の終末による神の国出現という時点の両極性と、時点の意味内容の対蹠性が示されている。終末を経て出現される神の国は、無限の過去性を示す創造の時点から次第に進行して、将来において、いわば歴史の進化の理想さえも予想される新奇の神の国へと到達するという啓示である。ここでその神の言と事柄の真実性を論議しよ

うとするものではない。

大本における「神国の世」とはかかる意味の、将来、新奇に出現されるであろう「神の国」の如きものとは全然相異なるものをいうのである。「神国の世」は「元の昔の神代」の還元なのである。両極時点においても、全然標示事実が相違している。神の創造を初点とし、終末による神の国の出現が終点とされている。そして特定人の啓示における神の言が、神の意志の仲介をなしている神の国がその仲立の時点から始まったのではなく、将来の或る時点、即ち終末において出現することを約束しているのである。始点、終点及びその仲立の啓示の言葉もすべてが事実に裏付けをもつ何ものもない。すべて信仰の事実、その信仰において神の事柄として創造されるというその信仰に根拠をもつのである。

大本は全くこれに反し、始点、終点、仲立の神の言もすべて事実の裏付けを持っているのである。この点、重要なる宗教的意義のあることを念頭におかなくてはならない。大本における歴史観の起点は、「神国の世になった」との神の言葉、啓示に論拠を有することを忘れてはならない。時間の経続、時と共に出現する事実の継起はすべてこの論拠の上に成立つことの意義は、まことに重大性を有しまた大本の教の根基をなし、そして大本史観の論拠をなしているのである。

立替え立直しと神国の世

大本においては、「成る」「表に現われる」「出て来る」の言表によって事実の生起がその内容を裏付けている。その事実は時の経過において出現される。しかも大本の「教の通り」順序にしたがって生起するのである。この諸般の生起する事柄、事件の順序を概括して「仕組」「経綸」といった言表をもって教示されている。「昔の大本からの神の仕組が成就いたす」「蔭からの仕組がいたしてある」「三千年余りての仕組」「水も漏らさぬ経綸」「蔭から世界をつぶさんように、つらい行をいたして経綸をいたした」「誠一つの先祖の神の経綸」「昔からの経綸」と幾多の神の言が教示されている。「神の仕組」

「神の経綸」は、時の順序にしたがって出現される事柄事件を意味していることは明らかである。いわゆる歴史事実、歴史事件である。大本の教は正に歴史を内具しているといわなければならない。経綸こそが大本の教の根幹をなしているということが出来よう。大本の教理は、かくて大本史観によって肉づけされている、あるいは歴史ぬきの教理は、大本においては、あり得ないということが根本の重要な性格である。歴史である限り、それはまた一面世界との関連が内具されている。したがって大本の教理は、またその性格において、世界性を具有しているということも出来よう。それ自体、世界性を有するがゆえに、大本の教理は世界に直接する意義を有するのである。単に論議としての有意義性ではなく、事実関係的に有意義であるのである。大本の教ぬきに世界が考えられないのは、正にかかる事実の上にあるのである。

「神国の世になった」ことの論拠の上に、教理と史観は支えられなければならないことを注意した。経綸あるいは歴史の面から、これを中心にしつつその理由を述べよう。もっとも、その歴史は、全く一般の歴史観からみてのそれではなく、神の経綸としての神側からの生起という意味において、神の意志の展開という意味においての歴史観であることから、生起の事実の理解の仕方が、おのずから一般史の立場と相違することは当然の事理ではあるが、充分に念頭においてかからなければならない

「元の昔の神代に返し復す」との神の言の言表は、既往性を意味すると共に「神国の世」の出現のために、即ち「さらつの世、万古末代つづく神国の世」に「立替え立直す」との未来性が、共にかかって、現在の狀況下において、「神の世になった」という明治二十五年の初発の神諭の現在性の言表との関係が、充分に解明されなければならない。

「この世は神国の世であるから善き心を持たねば、悪では永うはつづかんぞよ」の神の言が実質的に意図するところの裏面の現実は「神の思いを知りた人民はだんだんなくなりて、利己主義の行方ばかり致してこの世を強い者勝ちの畜生原にしてしもうて、神のおる所もないよ

うに致したから、モウこのままにしておいては、世界がつぶれてガキと鬼との世になるから立替えをいたさなならん世が迫りてきた」といった醜悪無道の現実と関連するのである。「神国の世になった」といわれる神の言は正にこの現実との関係においては正反対の事実である。さきに大本の教は、神の言は即ち事実を内具すると述べた。しかるに「神国の世」と現実の狀況とは、この点、いかに理解しなければならないか、単なる空言ではないかの批判を受けなければなるまい。ここには勿論、霊界の実在を前提にしての理解にまつべきことはいう迄もないが、それは「将来性」といった「神国の世」への「立替え立直し」の教理と相即して理解されなければならない。大本の教においては、この「神国の世」は「立替え立直し」の教理と一体として観念されることによって完全性が示されるのである。「立替え立直し」の教理ぬきに大本の教は完全であり得ないということは、「神国の世」ぬきには同様に完全ではあり得ないと相即している。この限りにおいて、この「将来性」は「現在性」に相即して初めて成立するということが出来よう。また、神の言として、「この世の元を創造て世界中の一切のこと、何一つ知らんということのない身魂でないと、今度の二度目の世の立替えは、世界を創造るよりも、何ほど骨が折れるか知れんぞよ」「こういう世が一旦出てくると申すことは、地球を創造る折からよく判りておるが」との神諭に示され、「善一すじの純粋の元のお血筋で末代の世を立てゆく結構な仕組」とも教示されている。先に述べた現在性に相即する二度目の立替えは、この世の創造の「既往性」と、また必然の内容的関連性のあることを教示して余りないのである。従って「既往性」も「将来性」も共に「現在性」の角度において、その時点において、集約されていることになる。力点は全く「現在性」におかれてあり、論拠の起点がここに存して始めて全歴史に光彩を放っているのである。教理がこの現在性に、「神国の世となりた」ことのこの宣言に焦点化され、照明されていると同時に、諸般の歴史の現実の事実過程も、その本来的真義が、この時点から意義づけられもし、その真義

が読解されなければならないことにもなる。「とどめに艮の金神があらわれて、世の立替えをいたすぞよ」は、「将来性」を招来する主体の神は「終局」的行為の主体者であると共に、それへの過程の諸行為の責任者であることは、おのずから立替えの仕組との関連性において明らかである。また同時に「地球を創造る折からよく分りておる」「天地の大神」、「この世の元を創造た」「身魂」「日本は神の初発に修理えた国」といった神の言の「発端」的行為の主体者でもある。

艮の字は艮りを意味し艮めを意味することは誠に意味深い、味ある言葉ということが出来る。艮、艮は従って永遠性を言葉自体の中に意味を内具しているのである艮を意味する「将来性」の「神国の世」の出現に関しては「先ぐりに前途のことを知らせる」といった警告、予告的性質の告知、その告知の詳解を意味すると言うことが出来る。「この大本の中に実地をして見せてある」といった具体的指標、具体的経過である仕組と経綸についての水も漏らさぬ神の配慮と蔭からの守護、さては、「利己主義」「強い者勝ち」「餓鬼」「鬼」「闇黒」のような悪神の世である現世に対する直截な批判と認から、このような現実の否定または超克として生まれる「松の世」「神国の世」の相貌を示す目的の明示、その経綸、仕組の激烈さを指示する「世界がウナル」「末代に一度の仕組」のあらわれ、「世界の人民三分になる」といった経綸の過程としての大峠の開示、「立替えの命令」と全過程の責任者「総大将」の明示、ために困苦におちいる「人民」の「救助」、「改心」「身魂みがき」といった神の大愛の明示、これら枚挙にいとまなき諸事項については、詳細に述ぶる余裕を今は持たない。後者即ち艮に当る初発の事情に関しては、「神が初発に修理え」るとか、「天と地との先祖の神」「昔の大本からの神」の言があり、その長い歴史の過程を「三千年の経綸」と表現して「現在性」に集約している。「日本の国は二度目の天の岩戸開きをいたして、日本は日本の誠のお血筋と元の天照大御神様の世へ、神政を捩じ直して、世の大本からのお血筋で万古末代を建て行く世が参りてきた」と

ある教示は、よくこの間の事情を開示するものということが出来る。

以上の所説から大本の神諭は、その実質的内容は、歴史としての経綸を形成していることを教えたと考えられる。大本の教えといい、教理といい、それは経綸がその肉付けとなっていること、経綸ぬきの教理は大本においてはあり得ないことを示している。

大峠と世の終り

大本においては、「神国の世となった」との神示が基盤をなし、これを基準にして、すべての教理は光彩を得着色されるのであった。現実の世界との関係において、「神国の世」実現過程として、いわゆる立替え立直しの教理、その具体的歴史事件として指標化される「大峠」なる言表は正に特色性を示している。大峠は、いわゆる終末に相当する一種の類型的性格をになっている。しかし、大本のいわゆる大峠は、その教理の必然の帰結として終末と異なる性格をなしていることをはっきり示している

いわゆる終末はすでに一言したように、「世の終り」、この世的な一般史の終末を内具的関係としている。これに反し大峠は、「世の終り」、上述の「歴史の終末」を意味しない。世の永遠の継続と歴史の連続を前提としつつ、世の在り方、歴史の出来事の意味づけ、価値が、別異な在り方、意味、価値の転換が問題であるのである。それは「神国の世となった」ことの事実に関連して、始めその出来事が可能ともなり、在り方、意味づけなされるところに由来するからである。「神国の世」の現実的、実質的現表がなされる立替え立直しの仕方、様相に関して始めて「大峠」が問題となるのである。いわゆる「神国の世」とそれへの「立替え立直し」ぬきには「大峠」の事実は招来され得ないのである。大峠は、いうならば、立替え立直しの劇的事件でなくてはならない。平和裡に人為的に、また論理の求める必然的に生起する歴史事件ではないのである。特定の歴史的実質の極限状況において、神意によって生起する非常、超論理的歴史事件を意味している。それはいわゆる終末の様相と類似性ある歴史事件

でもある。神の言としての神諭は、大峠に関しての記事を次のように開示している。

「暗黒の世に成りておるぞよ」「悪道の世になりておるぞよ」かくて「昔の神世に立替える時節が来たぞよ」「時節が近寄りたぞよ」「一旦は世界はいうに言われん」「この世は一旦は泥海に成るところであれど」といった「どうしようにも激烈しゅうて傍へは寄りつかれんような事が出来てくる」と警告している。このような激烈しい出来事を大峠という言葉で表現している。「世界の大峠を越すのは、神の申すように素直にいたし、どんな苦労もいたす人民でないと」越し得ないといっている。

従って、神諭が示すように、「神国の世」の実現は大峠を経て後に見ることが出来ることは明らかであり、立替え立直しは「神国の世」実現の教である所から、「大峠」と「立替え立直し」との性質、関係が問題となって来るともに「神国の世」実現という目的的関係と、その目的の成就前の歴史的過程の意味を俱有している。その両者は究極の指標的意味においては、むしろ同一意義をなしているということが出来よう。同じく目的成就への過程においても、目的的関連において直接するか、間接するか、範囲および規模の広狭、または大小、人と世とへの影響の大小、苦難の強弱等によって、過程途上の歴史事件に差異が存在する。実例的にいえば、天災、戦争等の異例と病貧等の通常の例の差異が考えられる。が、神諭における上述の言葉から「大峠」は正に激烈、言語に絶するていの事件が含意されている。「立替え立直し」はかかる事件をも内に含めつつ、「神国の世」実現、成就の綜合、総括的全過程内容を総称的に言表するものと解することが妥当であろう。従って「大峠」と「立替え立直し」の両者は、「歴史」の行動といった角度からは同一性を有するも、歴史事件の行動の全体から観る時は、全体とこれを構成する部分との関係から「大峠」は「全体」的性格を有する「立替え立直し」の「部分」的性格を有しているといえよう。ただ時間の視野がこれに入れられる時に、やや時間的経過として長短が考えられ「大峠」の短期性が予想される。したがって、この両者の実

質的性格は全く同一であるが、その前後、様相、全体、部分等の相互関係による指標上の差異が生まれて来ると解するのが至当といえよう。

ただ重要なことは「立替え立直し」と「大峠」は、ともに神の言として啓示されているという神の真実である。神の経綸の事柄、事件であることである。この両者は事件として、事柄として、従って必然に生起しなければならないことを教示されている。その生起するや否やは、すでに問題外に属することであって、必ず生起することの自覚と覚悟が問題なのである。これはまた、救済と信仰との関連を有している故に、さらにその箇所において、ふたたび触れて全体の中に意味を理解して頂くことにしょう

立替え立直しと経綸

以上、「大峠」を主題にしつつ「立替え立直し」を述べたのであったが、「立替え立直し」を主題として述べる補足説明の段階になってきた。

「立替え立直し」と「仕組」または「経綸」との意義および関係が問題の第一である。「立替え立直し」の主体は、いう迄もなく神御自身でなり「仕組」または「経綸」の主体もまた同一神御自身である。神の意志の展開として表現されることにおいては、その性質上の差異は全然ない。「仕組」または「経綸」という神の言は前述にもあるように、神の意志、行動の特定のワク付け、時間的秩序、したがって企画が問題である。「立替え立直し」を神の意志、行動の企画的配慮の点から秩序段階の考えを挿入するとき、生ずる概念が、「仕組」または「経綸」といった秩序的整理による指標が生じて来るものと考えられる。大本の神諭を調べる時は、以上のような一般的、整序的理由によって理解上の便益を与えるものではあるが、これを意識的に計画的に分けて使用されているものとはいい得ない。いな、異語同義的に使用されているのである。したがって、字句上のまたは理解上の便益によるよりは、むしろその本来性において受取るべきである点から言えば、一応、上述の観点を頭においての上なれば、さして両者の区別、差異に過敏である必要は

ない。むしろ自体に即して真意を受取るといった立場をとるならば、両者を余りに差別して本意を失うことを避けるを勝れりというべきであろう。むしろ、両者の究明によって、「神国の世となった」大宣言との関係を、より深く正しく自覚し理解することが先決重要問題である三千年来の仕組実現の大宣言は既になされ、しかも現実は暗黒、神を見失える、利己主義の獣の世の様を呈している。これを「翻(かえ)して」「根本から」「さらつの」「神の心」にかのう「神国の世」にねじ直してこそこの大宣言は、神の言の本来性としての事実、実質が現表され、成就される。

「三千年にわたる」「昔からの」「天と地の先祖」の「生神」の仕組、または経綸の歴史的展開の事実が、立替え立直しである。仕組または経綸は前述によって明らかなように「神国の世」出現の神意の企画的指標である「神国の世」こそ、神の内奥の真意である。この神意を中心として、その実現が経綸、または仕組であり、客観的に、神意の存在を一応カッコに入れて考察された神意実現の具体的事象が、それ自体の面から理解されて「立替え立直し」の言表となったと解すべきである。

次に第二として、「立替え立直し」と一般歴史との関係である。究極においては、一般の歴史観と大本史観との関係の理解が問題解決の鍵を与えるものではあるが、これを内にふくみつつ「立替え立直し」と「一般史」の関係に触れることにしょう。

「立替え立直し」はその前提として「神国の世」を持つ。それは「既往性」と「将来性」を内具する「現在性」において「切迫し」「せかれた」る緊急性に追われての「神の仕組、経綸」の展開、その限りにおいての直接性目的性を要件とする歴史的行為でなければならない。これに反し一般史は、神の意志に直結することなく人為的理想実現あるいは文化的理想実現を本来的意図とする歴史的行為が内容をなしている。いうならば、前者は神の行為に基因し、後者は人の行為に基因する。前者が神中心的行為とするならば、後者は人間中心的行為であるということが出来よう。全く次元と性格を異にするもので

ある。歴史事件の基因においても、一は「神力」が他は「人力」が中心となる。また歴史の成就は、神の責任に帰一するのと、人の責任に帰一する差異を持つことにより、両者の歴史事件の発生の根拠が全然異なるのである「立替え立直し」は必当然に生起する絶対的根拠をもつに反し、一般史は単に相対的根拠と、その限りにおける必然性を持つに過ぎない。その史観のいずれたるを問わず、人為に基づくものは、過去性または既往性に基盤を見出しこの論理的必然性を唯一の根拠とするに過ぎないこれに反し「立替え立直し」は単なる過去性または既往性にのみ限定されず、これと共に「将来性」をふくむ「現在性」、換言すれば、創造の原理を基盤とする絶対的真理性を根拠とする。一般の歴史を超越する超歴史的歴史が「立替え立直し」の歴史事件である。神の歴史事件である。

「立替え立直し」においては、神の意志をぬきにしては在り得ない。人間のすべての言動を超えての歴史事件である。神の仕組、経綸として人の言動が参与するに過ぎない。この参与の限度において、神の意志に直接するか、または間接するかによって歴史の生起の仕方に軽重の差を招来するでもあろう。しかし、それは神の経綸としては、遅速、深浅等の価値づけに差等はあり得ても、正に神の歴史事件であることには変りない。しかし、神の意志に違背し矛盾する人の言動、反神的言動による歴史事件は全く「立替え立直し」の歴史事件とは全然無関係である。いな、「悪の世」「獣の世」「利己主義の世」「闇黒の世」の歴史事件であり、正に「立替え立直し」の歴史事件によって打ち消され、抹消され、亡ぼされなければならない歴史事件でなければならない。一般史がその意義と価値を持続し得るのは、少くとも「立替え立直し」に直接または間接に関与する限りの歴史事件の性質を有する場合にのみ可能となる。しからざる限り、あっても無きに等しい空花(むだ)的意義しかないのである。いなむしろ滅却される運命を持っているのである。

なお注意すべきは、生起する事柄、事件の素材の単なる事物性と、その事物性が負荷する意味、価値としての

指標との理解である。単に世俗的には笑い草または無視される事件、事柄といえども、その事件、事柄の事物性が負荷している意味が、「立替え立直し」、換言すれば神意との関係において有意義である場合は、見棄てられる野の白ゆりが持つ神の聖浄さと生命の美しさを示すの例えの通り、無限に通ずる意義と価値の光をあらわすに似ているのである。

経綸の終局点

最後に、経綸の終結点である神国の世について述べなければならない。

「天下泰平に世を治めて」、「上下そろえて人民を安心させて」「末代つぶれぬ」「万古末代つづく」「天地の大神の直系のお血筋の」、この世とは「全然新つの世」が、神国の世である。その世は、「金銀を用いでも、結構に、地上から上がりたもので国々の人民が生活るように気楽の世」である。人について観るならば、「神の心に成り」、「思うように成る」、「昔の世の本からこしらえてある因縁の身魂」、「水晶魂」の人々が神示され「天地の誠一つの先祖が」「末代の世を持つ」のであって「元の昔の神代」の「先祖の」「善一筋の純粋の元のお血筋」が「末代の世を立てて行く」のである。いわゆる「終末論」にいうこの「世の終末」ではなく、「この世」が「全然さらつにされた世」がこの世に連続して、新しく出現するのである。神の言にあるように気楽な世地上の楽園、「地上天国」が即ち「神国の世」でなければならない。従って、この「地上天国」「地上の楽園」の実現が即ち「立替え立直し」であり、「世界に大きな事や変りたことが出来る」こと自体が「立替え立直し」「大峠」の事実を示していて、これらを経過して「地上天国」である「神国の世」「松の世」は出現することになる。この世の終りでなく、この世に「新つに」実現されるのである。

なお「経綸」については、言葉をもって事実、事件そのものを言表する場合のほかに、素材の事実の型を大本の中において表示する場合のあることである。大本にあ

った事実は日本において、日本に在った事実は世界に出現する場合を指示している。恐るべき神の言である。言表は、素材の事実の意味、指標をなしている。具体の実例は枚挙にいとまなき程、大本の中に実現したのである

大本の教理は、経綸と共に生き、それは、その教理の主体である大本の神が、正に「生神」として働いている実証を示して余りある。啓示の特性であると共に、大本が文字通り「大本」である事実を表示している。大本は教理と共に、神の経綸が現実に生きている場所である。啓示においては、この事実をくどいぐらい数年にわたり示されている。神諭を読む者をして唯々驚愕せしむる限りである。神の言、神の啓示である品位に驚嘆する外ないのである。

現実に大本にある事実が、「神の言葉」通りに生起する驚異は、じかに知る大本人にとっては、その「経綸」と共に、大本神の実在を、信仰を通してと言わんよりは、現実の生起の事実によって骨身にしみて、痛感される。事実が神の言の通り生起するのを体験する者は、神の実在を疑うとして疑い得ない力強い圧力をもって知らされる。

学問により、神学により、また信仰の理解によって神とその実在について、自覚するのでなく、神がみずからを事実の上に顕現することにおいて自証するのである。

（完）

「巨旦、蘇民」両将来の古記述が意味するもの（上）

―実証される「大本教義」の神韻性について―

佐々木のぼる

【序】

「おほもと（二月号）」に三村氏の「大本節分大祭と国祖御大難の御因縁」という小論がのせられていますがそれは大本節分大祭の〝意義〟がまず簡単に説明され、ついで五節の節句の行事のいわれを知る上で参考となる「巨旦将来、蘇民将来のもの語り」に関するもろもろの古文献の内容が学問的な角度より分折、検討されながら両者の比較から導き出される決定的とも思われる矛盾が指摘されています。そこから氏は「……備後風土記にあるような巨旦将来（艮の金神）を、素盞嗚尊が滅すというようなことはあり得ないことで、牛頭天王を素盞嗚尊だとするところからきた間違いか、あるいは故意にネツ造したものとしか考えられません。……」という見解をのべられる一方、その結論においては「巨旦、蘇民に関する文献の紹介は、軽い気持で読んでほしい」という意とともに「奥に奥があり、そのまた奥に、大奥がある」（神諭）とあるように、そこに何らかの深い意味が秘めら

れているのかも分らず、これらについても、その観点から眺められなければならないことを指摘されて、その結びとされています。

三村氏の経歴を待つまでもなく、この小論の内容を検討するだけで、その国文学、民俗学に対する造詣の深さを充分に偲ぶことができますし、従って、この小論の中から幾多の貴重な事実を学ぶことができます。しかし、ここで問題となるのは、三村氏の小論の範囲の限りでは大本節分大祭の意義と巨旦、蘇民の古記録に対する解釈を結びつけることができず、その決定的とも見える「矛盾」が納得のゆく深い解明もないままに、依然として「矛盾」のまま残されているという事実です。

即ち、聖師は「巨旦将来は艮の金神のことである」「蘇民将来とは午頭（マツノ）の眷属なり」とのべられているにもかかわらず「どの伝にも一様に巨旦将来を鬼神、悪神として取りあつかい、蘇民将来を慈悲心の深い善神と伝えている点は一致しています。……」（三村氏）という事実を、如何に解釈すべきかという疑問が当然そこに湧いてくるに違いありません。三村氏の弁を借りるならば、「大本の節分大祭は国祖ウシトラの金神（国常立尊）の御遭難をしのぶ厳粛なお祭りであると同時に、国祖の再現をお祝いする目出度いお祭りであるとされています。国祖の大神さまは、あたかも節分の夜に御大難に遭われ

この一文は本年二月号の「おほもと」誌にのせられた三村光郎氏の「大本節分大祭と国祖御大難の御因縁」という小論を読んで、別の面から考察されたものです。

ただここで問題の焦点は、聖師が「巨旦将来は艮の金神のことである」「蘇民将来とは午頭（マツノ）の眷族なり」とのべておられる点と、どの伝説にも一様に巨旦将来を悪神として取扱い、蘇民将来を慈悲心の深い善神と伝えられている点とを対照して、巨旦将来は厳霊であり、蘇民将来は瑞霊であるという独創的な解釈を下した点であります。

しかし、この筆者は大本信者ではなく、マルクス主義者でありますが、最近「霊界物語」を読み、大本教義にふれて、いわゆる弁証法的唯物論の立場をとるものが、いかに大本教義の神韻性を理解しているか、ということを知っていただけばよいと存じます。

——編者——

て御隠退になり、そしてまた節分の夜にふたたび世にお出ましになって、もとの御地位に恢復になったとされている。……」にもかかわらず「……わが国上代からの美しい習わしとして上下共に盛大に行ってきた、それらを悪神どもの国祖調伏の習わしであるといい切るには、相当の根拠がなければ世間は相手にしないでしょう。今日のような言論自由の時代ならいざ知らず、あの伝統を重んじる国粋調の花やかな時代にあって前述のようなシメナワ、赤白の鏡餅、お雑煮、門松、豆まき、五節の節句行事等の国の上下をあげての祝事をすべて〝悪神が元の親神を押しこめるための行事〟であったといい放ったのだから、この一つだけでも当時の大本が悪神のヒツポウからだけでなく、一般からも誤解される大きな要素を含んでいたといわなければならないでしょう。しかも資料は大本の一方的な資料ばかりで〝いいおきにも書きおきにもない〟ことばかりであっては、一層その信憑性が疑われてくるのは無理からぬことであったといわなければなりません……」というような、「大本」に対する矛盾感と批判は、そこに奥の奥に対する納得のゆく、しかし分り易い実証的な解明がない限り、当然一般人の正しい理解を得ることは困難となる怖れが多々あります。

そこで私が巨旦、蘇民将来の古記述と三村氏の説明を味ってゆく中に、自分でも不思議なくらい次から次と直覚させられ、その物語りに秘められた意味を理解してゆくに従って、そこから導きだされた（私なりに）何等の矛盾のない解明をいろいろな角度から、以下にのべてゆきたいと思います。まず私が得た結論から、この古記述に対する評価を端的に申してみますと、それは客観的な「歴史的意義」と「民俗的意義」が「霊的意義」を奥深く秘めながら、幾重にも相互にからみ合せられているのであって、大本教義の深さを実証するものでこそあれ、決して間違いでもなく、またネツ造されたものでもないすばらしい陰陽的言霊象徴文学だということです。つまり、そこには古代の歴史的事実が象徴され、同時に当時の地方の動きとか庶民の意識が前面に浮きぼりされているばかりでなく、その中に一貫して上古より日本人が伝

え伝え来たった「世界観」と「真神」に対する民族的信仰が一直線に……そしてそれも弁証法的、飛躍的に貫かれており、しかも、それらを相互にあざやかにからませながら象徴されているのであって、その陰陽的象徴の深さと底知れぬ巧みさに、私は今さらの如く、古代日本民族のすばらしい英智とその鋭い霊的感覚と、素朴ではあるが奥ふかい唯物論的見地を知って驚ろかされております。

それにもまして深い関心と感嘆久しくせざるを得なかったのは、大本の教えがそれらの古記述と決定的な矛盾をはらむが如く見えていて、実はそこにこそ内包的にピッタリと矛盾なく直結してゆく奥深さをもち、古記述に秘められた霊的な真の意味を完全に解明し止揚することを可能とするという事実であって「奥に奥あり、そのまた奥に大奥がある」の神諭を一しほの想いで深く味わされたものでした。同時に私は、この「教義」が秘めるところの深い意義を「現代」の諸課題と如何に正しく結びつけ、具体化するかという問題についても深く考えさせられ、また心ひそかに期するところもあった次第です。

【一】

前おきはこれ位にしておいて、では何ゆえ巨旦、蘇民両将来の物語りが、われ〳〵日本人の祖先のすばらしさを実証するものであり、大本思想に矛盾しない奥ふかい霊的文学であり、また歴史的、民俗的文学でもあるのか……したがって大本節分大祭は、いわゆる従来の単なる節分行事と本質的に異った如何なる深い意義がこめられているのか、ということの解明を、三村氏の小論を中心としながら「霊界物語」その他の歴史的諸文献をも参考として、その基本的な線を具体的にのべてゆきましょう

ここで解明の対象となる巨旦、蘇民両将来の物語りの大要を、三村氏が分りやすい現代文に訳されたものにしたがって参考までに次に記してみますと、『むかし北海の国に住んでいた武塔神が、南海のサカツラ竜王の女頗梨采女をめとるためにお出かけになった。ところが備後国の疫隅社のほとりで日がくれた。宿を求めようとして

見渡したところ、巨旦将来の大きな屋敷があった。巨旦はこの地方では非常に富んでおり、多くの家屋をもった長者であった。そこで神は巨旦の屋敷に行かれて宿を乞われた。しかるに長者は口汚くののしったあげくこれを断った。途方にくれた神が弟蘇民将来の家に宿を乞うた蘇民将来はものすごい貧乏だったが慈悲ぶかく宿を貸された。……のちに年を経て、神が八柱の子をひきいて南海から北海に帰る途中、ふたたび、蘇民将来の家によって礼を申すと共に巨旦将来を滅された。このとき神は「われは速須佐能雄神なり」とその素性を明かされ、今後疫病のはやるようなことがあれば、蘇民将来の子孫といって茅の輪を腰の上につけておれば免れることができると詔りされた』というのがその大要であります。

もっとも、巨旦、蘇民の物語りを記述したものは「備後風土記」をもって初見とし、次いで古い陰陽道天文博士安部晴明の撰述した「簠簋内伝」を始めいろ〳〵の古文献が残されているとのことですが、部分的には多少の相違はみられても「しかし、いずれもその趣旨に基本において合致しており、巨旦将来（艮の金神）の別名を悪神に仕立てている点」は共通しているところから、やはり「備後風土記」のあらわされた当時、およびその以前の歴史的、民族的背景がまず深く考察される必要があります。といいますのは、各国いずれの民族的古文献をとってみても、それが古代のものであればあるほど、そこには当時の出来事とか言い伝えが、民族地方の風習およびそれぞれの世界観にからませて象徴的に画かれ、浮きぼりにされたものが多く、特に古代人の生活に密着していた民俗的神観とその崇拝が陰に陽に貫れており、それらが渾然一体となって記録されているというのがその著しい特長だからです。このことは、わが国の代表的古代文献である「古事記」の内容を想うだけで容易にうなずけるところでありましょう。

いずれにしても、巨旦、蘇民両将来の記録は単なる「物語」でないことは勿論、「歴史的事実」のみを象徴的に画いたものでもなく、といって、単なる神話的伝説とか民族的信仰を物語風に浮きぼりにしたものでもないの

であって、そこには日本古代人の民俗的神観を中心とした世界観の経過が、実証的歴史と結びついた地方の動きと共に、幾重にもからみ、からめられて、象徴的に画きだされており、従ってそれは、深い「意味」を内包した「民話」であるという認識に立てば、そこにおのずからこの記録と結びついてゆくもろもろの歴史的背景が浮かんでくるに違いありません。

この歴史的背景の時期を知るためには、「備後風土記とは出雲風土記、播磨風土記等の古風土記と同様少くとも千二、三百年前の記録と考えられている。……」（三村氏）こと、および「風土記」とは「奈良時代の七一三年（和銅六年）の元明天皇の命令（詔）により諸国より提出した地誌で、国々の地理、産物、風俗、伝説などが記されたもので出雲、播磨風土記はいずれもその時のものであって、平安時代の初め九二五年にも、再提出されたことがあり、これら両度の風土記の逸文は諸書に散見している」（「現代用語の基礎知識」による）ということを結びつけ、あわせて聖師が「国祖の御隠退はまだ文字（漢字）のできる以前であった。しかし文字のつくられるころは、その事実がまだ生々しく伝わっていた」（三村氏小論）といわれている言葉を検討することによって、物語が対象にしている歴史的時期の焦点が大体判明されてきます。即ち、帰化人を通じて、文字をもたない日本で既に五世紀始めに漢字の使用がみられるのですが、しかし文字の使用は、中央政府の記録をつかさどる帰化人の家である史部（ふひと）の人々ぐらいで、一般人民はもちろん、支配階級の人々にしても、まだ大陸の学問を知るという段階ではなく、それにつづく六世紀始めごろから文献の成立がみられ、有名な「古事記」も七一二（和銅五）年に太安麿が「帝紀」「旧辞」等の文献を整理して加筆したものであることを思えば、巨旦、蘇民の物語に象徴される「歴史的事実」は、日本人が次第に文章を認めるようになった八世紀以前が、その直接の舞台であるといえるだろうと思います。

なお参考までにいえば、「和銅六年（七一三）に元明天皇の命令で諸国から提出した地誌（風土記）で現存しているもの

は、「出雲、常陸、播磨、豊後、肥前」の五国分である」と（「現代用語の基礎知識」東大史料編纂所、西岡虎之助氏）されています。これが正しいとすれば、「備後風土記」は平安時代（九二五）に再提出したものに属するのではないかとも考えられます。

そこで当然大きく浮び上ってくるのは、百済よりの仏教伝来（五三八年）であり、「日本書記その他の文献には、百済から仏教が送られてきたときに、異国の神を信ずるならば、日本の神の怒りを招くであろうという理由で、これを受けることに反対した物部氏らと、これを信仰しようとする蘇我氏との争いがおこり、物部氏らによって仏像、仏堂が破壊される事件が起ったりしたように記されている。……最後に物部氏を滅ぼして勝利を占めた蘇我氏が、物部氏に仏敵という名をかぶせた……」（「日本文化史」（家永三郎氏著）という話も、よく知られるところの歴史的事実ではないでしょうか。

歴史学者として著名な家永氏も指摘されている如く、「仏教が百済から伝来したときに、日本人はこれを〝異国の神〟として理解した」のであって、日本古来から伝承された「神観」が支配的であった当時にあっては、「異国の神」の伝来、そして物部、蘇我氏の争い、引いては「日本神」（国祖―艮の金神）の立場を代表した物部氏の滅亡という歴史的大事件、つづいて「仏教は最初は蘇我氏ら豪族の間で私的に信仰せられるにとどまったが大化の改新の近づいたころから、朝廷から公的な信仰を受けることとなり、舒明天皇はその皇后とならべて百済大寺を造り、天武天皇は百済大寺を移して大官大寺の造営をはじめ、また薬師寺を建て、さらに諸国に命じて公の行事として金光明経を読誦させるなど、政府は仏教興隆のために全力を注ぐにいたった。朝廷の仏教興隆政策は、聖武天皇のときに絶頂に達し、七四一年（天平十三年）には、国ごとに金光明最勝王護国之寺すなわち国分寺を建立することを命じ、ついで平城京に五丈三尺の盧舎那大仏の造営をはじめ、これを本尊とする壮大な東大寺を建立し、天皇みずから大仏の前にひれふして〝三宝の奴〟と称するなど、熱狂の域にいたっているのである」（日本文化史）……というような状態は、正に従来

の日本神（国祖）の御大難であり、御隠退であり、また滅亡として、当時の民衆に受けとられたのは当然なことでありました。

事実、これらの一連の歴史的経過は、直接、間接に地方民間に「仏神」としての仏教が普及しひろまった過程でもあって、このことは直ちに「日本神」に対する純粋な民俗信仰と古代民衆に純粋に伝承されてきた従来の「霊性的感覚」に、根本的な質的変化（否定＝「弁証法」）をおよぼした過程でもあったのです。即ち、「神」（国祖）に生き、「神」にすべてが支えられていた日本古代人の現世主義的、楽天的、開放的な本来の「霊性」の自然性にとっては、今や（仏教を始めとする）大陸文化のうちでも、もっとも高度な精神的な領域の移植（異霊の移植）という、外から加えられてくる圧力の前に、正に、いわゆるシュトルム・ウント・ドラング（疾風と怒濤）の激動の時代であったわけです。

ここに、聖師がいわれている「しかし文字のつくられるころは、その事実がまだ生々しく伝わっていた」の意味も、以上の歴史的事実と古代日本民衆の神観を想うとき如実に理解されてくると思います。

【二】

ここで、この間のいきさつを、「地方の動き」を主体として民俗信仰の変遷を一層ふかく理解するために、当時の地方状態を参考までに歴史的実証によって記してみましょう。

このためには「日本宗教史講座Ⅰ」（三一書房）における〝古代民衆の宗教（八世紀における神仏習合の端緒）〟と題する高取正男氏の秀れた歴史学的論文が非常に参考になるのですが、紙面の関係上、くわしく紹介することはさけて、その一部を記してみますと、たとえばこの論文中の「地方豪族と仏教」に「六世紀初頭に伝来した仏教は、当初は帰化人系氏族や中央の豪族貴族に信仰されただけでなく、地方民間に普及しはじめたのは、一般的に律令時代に入り、官寺仏教の体制が整備されるようになってからであった」とまず述べて、次に「しか

しそれにしても、大化前代において地方に全く仏教が及んでいなかったわけではない。石田茂作博士の研究によれば（寺院が既に各地方に建立されており……）その他に僅かながら瀬戸内海沿岸の諸国にみられることは、大陸からの伝来に対応するものといえよう」とあり、始め僅かであった寺院が次第に、ついには飛躍的に増えてゆく状態が歴史的実証的に理解されます。また、全文にわたり学界の定説となっている辻善之助博士の古典的な研究を始め、いろいろな貴重な資料によって「伝来の信仰に生きようとする人々が、その純粋性を護るために、外来的なものを排除しようとした……このような対立があったにもかかわらず……仏教と固有の神祇信仰とが、早くから互いに影響しあっていた……仏教受容のごく初期から固有の神祇信仰は仏教によって大きな影響をうけ、仏教もまた、固有の信仰に支えられて日本化の道を歩んだ……」ことが指摘される一方、「奈良中期以後に〝神は仏法を悦び仏法を擁護する〟という、消極的なものから〝神も一個の衆生であり、仏法によって苦悩を免れようとする〟といわれるようになり、奈良朝末期から平安朝初期にかけて延暦（七八二～八〇六）ごろから、八幡大菩薩とか多度大菩薩といって神に菩薩号をつけてよび神前にさかんに読経がおこなわれるようになった。そうしてこうした段階を経て〝神は仏〟となり、さらに〝神は仏の化身・権現〟であるという垂迹思想があらわれ、八幡大菩薩の本地は阿弥陀如来であるというように、どの神の本地はどの仏であるという垂迹説が成立した」という中央、地方を通じての日本的神観の変化、および神（国祖）の仏神（異国の神）に対する従属の過程――国祖の陽的（霊界の）主宰の立場に質的変化がまきおこされて、陰的立場に退去されたという歴史的意味はここにおいて実証される――が、その思想的変化のもとに、地方の神社が次第に寺院へと転化してゆく有様と結びつけられて、思想的、客観的両面より具体的実証的に展開されております。

即ち、ここからも瀬戸内海沿岸（備後地方）に代表される各「地方」に、当初はほんの僅かにしかすぎなかっ

た「仏神」崇拝が、大陸精神文化の陸続たる伝来、移植および中央、地方の弁証法的開連がひきおこす「動き」（力）などに相呼応して、その量的発展が遂には質的変化（「国祖」神崇拝の支配的時代より、滅亡的退去の時代への質的転化）をおよぼして、飛躍的な勢力をもつにいたったその過程が十二分に推察されることと思います

【三】

私のいわんとする巨旦・蘇民両将来の物語に秘められた歴史的意義・民族的意義の実証的解明は、以上で既にその方向が察せられることと思いますが、念のためにしめくくってみますと、「巨旦将来」は日本古来の「惟神（かんなが）らの道」・「国祖艮の金神（民族称）」という霊的面をその奥に秘めているばかりでなく、それは同時に国祖信仰の立場にたって仏神崇拝と闘った「物部氏」を始めとする、純粋な古来的信仰に生きんとした（体的）勢力を象徴し、それにひっかけて「地方」の「国祖」に対する民俗的信仰の陰陽両面の過程をもあらわしているのであって、それは幾重もの意味がからめられているのですがその名称がもつ「霊的面」における意義を大本教義的、言霊学的にいま少しくわしく解明してみれば「巨旦将来」の「巨旦」とは「大いなるあした（あさ）」という意味で、「一切のもののはじまり」即ち「物質的根源」としての本夾自然の物質性（体厳霊）的立場を意味し「将来」とは「未来、今後」が転じて「その後（変化発展の様相、現在時）」ということが意味されていると解釈すべきでしょう。ですから「巨旦」という名称は「大本哲学」によれば、天之御中主神（宇宙の大元霊＝元神）と大国常立尊（祖神）の天地剖判の体主霊従的「厳」の根元的な様相や働きが象徴されており、「巨旦将来」となれば「大国常立の尊のご神力によりて天地はここに剖判し、太陽・太陰・大地の分担神がさだまった（霊界物語Ⅰ）」ために「ご自身は地上の神界をご主宰したもうことになり、須佐之男の大神は地上物質界の主宰となりたもうた（同）」といわれているごとく、「元神・祖神」両神の厳の働きの変化発展としてあらわれ給うた「国常立の尊」

（祖神の新しい姿、即ち様相、国祖のこと）が言霊的に象徴されていることが理解されます。

そして国祖「国常立の尊」が「艮の金神」の別称をもたれる所以の意義は、深くはまず第一に「厳の面」として天地剖判の大経綸に際しての大地の修理固成の段階において、大国常立の尊が「日本国を地球のうしとらに位置してつくられ、神聖なる神のおやすみ所とされた」こと、および「日本の土地全体は元神の肉体であると同時に祖神により生みだされ、国祖は祖神の移り変りに他ならない」という、古代人の鋭い霊的感覚が生みだしたものに相違ありません。

次いで「瑞の面」としては「天の天照大御神、日の大神（伊邪那岐の尊）、月の大神（伊邪那美の尊）の御三体の大神は君系であり、国祖（国常立の尊）は臣系となっておられるが、元来は大国常立の尊としてもとの祖神であらせ給うから、御三体の大神といえども、元来は国常立の尊の生み給うた御関係がまします故に（霊界物語）」とあるように、本来の祖神が国祖に降臨されて地上神界を主宰（霊主体従的な働き。瑞）されるようになったことが、「厳の面」と共に霊的に把握されて結びつけられると同時に、瑞は緯を主体とした働きであり、引いては内なる働きであり、陰であり「艮」であることが感覚され、からめられています、

つづいて「艮の金神」が民俗称となった理由は、いうまでもなく先にのべたように、「仏神移植の働き即ち力（地上物質界の主宰「須佐之男の大神」として象徴）によって、国祖の御威光が寂れ、地上神界の主宰（陽）的立場より退去された事実」をも譬喩的に含んでいるのであって、この「真神（国祖）」の大本的俗称（艮の金神）一つをとってみても『大本神諭』が、如何に奥深い意味をもっているかが容易にうなずけるだろうと思います。

なお、三村氏は「日本全国この備後地方の一角をのぞいては、艮（うしとら）神社というのはどこにも存在しない」という事実を指摘されていますが、その所以の直接の根拠としては、当時の民衆にとって「日本神を祭る中心と思われていた伊勢大神宮が備後地方からあたかも

丑と寅の間と目されていた」こと、及び先に引用した家永氏の歴史的実証によっても理解されるごとく「時の朝廷を始めとする中央、地方の権力のもとに強力に押し進められた、仏教興隆政策が陰に陽に作用して「国祖神」の陰的別称をもって秘かに古来の神を祭り、神社（艮神社）を建立せねばならなかった当時の神祇崇拝者の立場」を推測することによって、なおさら、俗に忌み嫌われた「艮」の名称をもつ神社が、備後にのみ存在する理由が説明できるのではないでしょうか。

ちなみに言えば、「艮」とか「金神」の名詞は、中国古来の思想「陰陽五行説」「暦術からきた十干十二支」が日本的に吸収されて、次第に民間に深く普及されたものであって、「艮」とはもと「丑と寅の間即ち東と北との中間」を意味すると同時に、陰陽思想において「物忌み、忌み嫌われる方角即ち不吉や悪」等と結びつく意味をもつものであることを思えば、国祖御大難、御隠退の歴史的意義とか先にのべた言霊的意義を、譬喩的象徴的にあらわすためには実にピッタリとした陰的俗称であることが理解されましょう。このようなところにも、われわれの祖先である民衆（人民）が、すばらしい霊的感覚とすぐれた機智をもっていたことがしのばれて興味深いことではありませんか。

以上で聖師が「巨旦将来とは艮の金神である」といわれた意義が言霊学的歴史学的に理解されたと思いますので、一応切りあげて次に蘇民将来の説明に移りましょう

巨旦将来の意義が理解されてくると、「蘇民将来」とは歴史的には中央、地方を通じての仏教勢力を代表し、あわせて蘇我氏をも譬喩しており、「霊的面」においては、仏神霊（異霊）を象徴していることが直ちに解明されてくることと思います。そこで「蘇民将来」の「霊的面」の言霊的意義を解明してみますと、「蘇民」とは読んで字の如く「よみがえる民」ということであり、そこからあわせて「本来の神祇崇拝より仏神信仰へと移った人民」という意味をもっております。「蘇」とは梵語Stupa（蘇塔婆）の「蘇」であって、印度的思想・仏教精神の「解脱によってよみがえる」という意味とも結ば

れます。

さてここで問題となるのは「蘇民」の本来的な霊意「よみがえる民」ということの意義なのですが、これがまた「巨旦」同様、実に奥深い意味を秘めているのであって、この「物語り」の真意を正しく把握するためには、どうしてもこの言霊の深底を解明することが必要となってきます。

先にも説明したごとく「巨旦」（元神・祖神）の御経綸によって、天地剖判、大地の修理固成という根源の大業がなり、それに従って植物、生物、人間等もまた生み出されたのですが、「人間には日の大神と月の大神の神魂を賦与せられて、肉体は国常立の尊の主宰として神のご意志を実行する機関となし給うた。これが人生の目的である。神示に神は万物普遍の霊にして、人は天地経綸の大司宰なりとあるも、この理によるものである。（霊界物語）」とのべられている如く、「人間」は本来その始源において「自然体」であると同時に「神の垂示のままに」（かんながら）意志する＝自然霊性そのものとしての「厳瑞」的統一の自然体であって、現在の如き「自己意識」はまだなく、万物と混然一体として融和しており、いうなれば「自然的無意識」（自然性無我）の時代がつづいていたわけです。

歴史的実証によっても原始人・古代人に「融即」的性格が、支配的であったことが理解されるはずです。いわゆる未開人にみられる「トーテム」思想は、この「融即」的性格の一変形であることも、学問的に証明されています。

ところが「太陽界の光りの峻烈の強弱が大地球界に反映して、そこから同一状態の地球的陰陽状態が地球界に生れ」（霊界物語）、それが「自然的無意識」にも時の経過と共に次第に反映することになり、ここに本来の「自然霊性」の陽（厳）的立場は陰（瑞）的立場に転化し（潜在化して）、「自然無我意識」は、ここにおいて遂に質的に転化して（よみがえって＝蘇）、人間的な陰陽的性格をもつところの、いわゆる自己的に考える（力をもつ）「人間（我）意識」を生みだしました。

つまり「蘇民」とは要するに「瑞の働きを主体とした

民（体・人間）」という霊意を、その基底の意としているのであって、「蘇」の字が頭になっているのは「瑞の面」（潜在化した「自然霊性」の瑞の働きによって「よみがえさせられる」人間の様相）を主体としていることを意味し、「民」の字が下にあるのは、本来厳的霊性であった「自然的人間」（体）の「厳の面」が「瑞の面」（瑞的働き）に移り（よみがえる）、従属（下）することになった様相を示しております。言葉をかえていえば本来は厳的受動的に生かされていた「人間」が、その弁証法的否定によって、瑞的に生かされる仕組（根元霊の潜在）をもつと同時に、能動的に生きてゆく「自我」としての「人間（民）」に質的に転化したことを象徴する言葉が「蘇民」であるわけです。ここに「根元霊」の厳的本質（陽的霊性）は「人間」において瑞的性格（陰的霊性）によみがえり移って、その霊的作用は陽から陰へと転化して、本来の厳的本質（陽）に飛躍するまでの長い瑞（陰）的過程をたどるようになった反面、自然体であった「人間」の受動性（陰・無我）は能動性（陽・自我）へと質的に変化して、飛躍した「能動的無我」（能動的かんながらの道・自然法爾）への人間精神の旅路をたどるという仕組が生みだされたのであって、この人類的完成が「三千世界の立替」の窮極に通じ、個人的完成が「霊覚・悟」にほかなりません。

そこで「蘇民将来」となれば『「根元霊＝自然霊」が潜在化し「自我意識」を表面に押しだすことになった「よみがえった民」』の「その後の旅路の様相（変化発展のありさま）」が象徴されることになります。本来の体主霊従的厳霊の働きが、人間において霊主体従的瑞霊の働きに転化（蘇民）すると同時に、高度の質的飛躍に向っての過程（将来）を、現在われわれが辿っているということの深い認識をもつこと、および既にその宗教的霊的面の緒は『大本』の出現により開かれ仕組まれていることを霊的に直覚把握することは、この古記述の「物語り」の真意を悟る上にも『大本』の深遠きわまる神韻性を霊覚し、その偉大なる宗教的歴史的意義を深覚するためにも、なくてはならないものです。

いずれにしても「蘇民将来」とは「巨旦」の変化発展であり、「巨旦将来」と陰陽的関連をもつものであり、「巨旦将来」の厳瑞の変化発展の様相とは反対の「瑞」を主体とした、瑞厳の変化発展の様相を陰陽両面にわたって象徴しているという、これまた「巨旦将来」同様の実に奥深い意味が象徴されていることを知らねばなりません。

（未完）

創刊号正誤表（初刷りの場合）

頁	段	行	誤	正
7	上	2	〝救世〟	〝救世主〟
8	下	18	昭和	明治
29	下	15	一蓋万象	一炁万象
34	上	6	本当に	本当には
36	下	4	倫理方面	倫理的方面
38	上	2	発表した断片	発表したる断片
38	上	9	月刊推誌	月刊雑誌
38	下	1	におよび	および
40	下	5	恋慕する声	恋慕すとの声
40	下	17	二七年	二十七年
42	下	4	歴史でもあり、教祖	歴史でもあり、教訓でもあり、教祖
42	下	5	確言書	予言書
43	下	5,6		抹消
44	上	4	教道	教導
44	上	4	雛形	雛型
44	下	12	月界に到る能はざる如く	月界に到る能はず、青き天空は、如何なる測量術もその端を極むる能はざる如く
45	下	1	とこなし	ことなし

△噴水▽

節分大祭後、天恩郷で派遣宣伝使研修会が行なわれた時、一同朝陽館で教主に御面会していろいろな質問をしたのに対して、親しくお答え下さった。その中の二三。

問「おほもと誌の二月号、〃朝陽記〃に直日先生が「最近とくに、はっきりと日出麿先生を心から神さまとして拝ましてもらっています」という記事がございましたが、あれはどういう意味でございますか？」

この問いに対して直日先生はしばらく黙っておられたが、やがて「あの意味がわからないでしょうかね。わたしは人の妻でしょう。妻が夫を心から神さまとして拝ましてもらうようになったというのは、当り前のことではないでしょうか」と前提してお話しがあった。

「わたくしは日出麿先生の神格がどうのこうのといっているのではないので、人格が立派でなければ高い神さまはおかかりにならないと思っています。日出麿先生は初めから変りはなくて、ただわたくしが成長したためかも知れませんが、最近心から神さまとし拝ましてもらえるようになったから、そういったまでですわたくしはいつも信者の奥さんを見ているのです。女というものは、夫を批判しているものなのです。奥さんの態度を見ればその御主人が大がいわかるものです」

大体こういう意味のお答であった

○

問「日出麿先生をミカエルであると信ずるのは、間違っているでしょうか？」

答「その人が主観的にそう信じているのをいけない、というわけにはゆかぬでしょう。本部がそういったらおかしいでしょうね。また本部にそういえと迫るのはムリでしょう」

○

問「直日先生が大阪本苑で近く第三次戦争があるから、梅干を食べるといいということをおっしゃった、ということを伺いましたが、そうでございますか？」

答「わたくしは予言者ではありませんから、そんなことは申しませんよし明日戦争が起こるとしても、そんなことは申しません。ただわたくしは梅干は嫌いであるが、このごろ梅干し婆さんになったせいか、梅干が好きになったといっただけです」

○

四月十一日、皇居の園遊会に出発される前、筆者にこう語られた。

「わたくしが園遊会に招かれたから、大本の教がどうの、招かれないからどうのということはありませんけれども、信者が喜びますから行って参ります。信者は卑屈になっています。雨天だったらとりやめになりますが、わたくしが行ったという記録は残りますから……」

こういう意味のお話しであった。

○

安保反対の問題にふれて、直日先生が何かいわれたということを聞き出口伊佐男氏に尋ねたところが、「安保は反対なのですが、あまり行き過ぎた運動はしない方がいいといわれるので、初めからハッキリしていらっしゃるのです」ということであった。

○

或る時、直日先生は「わたくしは直感的にはわかるが、これをまとめる力がないのです」といわれたので「それは政治でございましょう？」と申し上げたところ「そうです」ということであった。

そして「政治というものはむづかしいものだと思います」と語られた

（文責在記者）

○

過日、大阪の大丸で「御作品展示会」がひらかれた時、奥井敬三氏宅へ立ちよって一日ゆっくり話した。

その時、「私は直日先生は非常に御多忙であるから、御機嫌うかがいか、特に用件のない限りうかがわないことにしているが、「教」のことについては直接お尋ねしないとわからぬことがあるので、お手すきの時を見て時折りお目にかかりたいと思い、内事の森（清秀）さんまでには頼んである」ということを話したところ、「実は、あなたに今日来てもらったのはそのことなのである」というのである。

奥井氏の話しによると、信者は大本の新聞雑誌の記事は直日先生、日出麿先生以外のものはあまり読んでいない、というのである。これは現代が新聞雑誌の洪水時代で、読み物が多過ぎるので、どれにも目を通すということはなかなか出来にくいということはわかるが、あまり好い傾向ではない。信者であるならば、少なくとも「愛善苑」誌、「おほもと」誌、「人類愛善新聞」ぐらいは一応眼を通すことはゼヒ必要である。さもなければ、大本は如何に動いているか、御神業はどう進展しているか

ということは全然わからないわけである。

それで、奥井氏のいうのには「直日先生のお言葉をマタ聞きすると誤り伝えられることがあるので、文章にして（プリントにして）流して欲しい」ということであった。これは他の地方にも、こうした声はきかれるが、全信徒にむかって伝えることは教団がなすべき仕事である。

直日先生のお言葉でも、時、所、位ということを考えなければならぬこともある。例えば茶道のことについても、甲の人には「お茶の飲み方ぐらい心得ておればよい」というようにいわれても、乙の人には「もっと深い心得が必要である」といわれる場合もあるかも知れない。

いろいろな機会にお話しされたことを綜合して聞くと、少しも矛盾してもいなければ、そこに一貫した御意志を汲みとることができるのである。

×××

N氏からの通信の一節に、次のような意味のことが書かれていた。参考のためにここに紹介しておく。

最近の共産圏の発展ぶりには、眼をみはらせるものがあるが、現在では量的発展というよりは、急激な質的発展の様相を生活のあらゆる面で具体的に示しだしており、このことは今後の国際情勢の変化をみる上で非常に注目すべき事実であると思われる。

例えば、税金撤廃とか、労働時間の六時間制の切り替えとか……その他資本主義のもとでは考えられないことが、法律の改革とともに着々と決定されているということであるが特に興味深く注目されることは、質的に変化した「新しい精神の型」が今や一般化し普遍的にみられるようになって来たという事実が、すべての中にハッキリ示されてきているということである。

例えば、ソ連では五八年の刑法改正で、従来の最高長期刑「二五年」（終身刑はない）を「一〇年」に定めている。そしてその理由として刑が再教育の目的のために奉仕するものである以上、二十年もの長期を課する必要がないばかりか、長期の自由剝奪はかえって被拘禁者に精神的肉体的に逆効果をまねく率が多くその教育的意義が失われてしまうということが、科学的に実証された故であるという。

またその仮釈制度その他をみても実に合法的で、実質的に本人の改心

（精神）だけが問題になっている。（中共は漸刑主義をとっており、本人が改心すればするほど、次から次に減刑処分または即時釈放して、社会発展のために貢献させる方法をとっている）

また犯罪者の急激な減少を指摘し昨年は政治犯の一人もなかったこともあげられていて、既にソ連人は（反共的デマの如何にかかわらず）経済制度、政治制度に「真の自由」を感じており、そのことが科学、生産、文化の諸面で具体的にあらわれており、犯罪の減少もその一例にすぎないことが指摘されている。何れにしてもこの刑法改正中の一点をとってみても、それは「社会全体の意識」と「具体的条件」の向上が伴って始めて可能なのであって、アメリカや日本のように青少年の凶悪犯が増大せざるを得ない条件のもとでは、理想を現実化したくても、現実の条件が不可能にせざるを得ないことが理解されるはずである。犯罪と隣合せにいるいわゆるルンペン、プロレタリアート層の意識の変革（更生）ということが、現在の諸条件のもとでは如何に困難な問題であるかをしみじみと痛感されるが、それはそれとしてこの改正が可能となるという一つの事実を少し考えてみただけで、質的に変化した「新しい精神」が既に普遍的になっていることがはっきりとうかがわれる。例えば、ソ連では犯罪者が釈放後、元の職場に気兼なく帰れるよう権利と雰囲気が確立されていて、帰るまでチャンとポストが明けられており、職場の人々は彼と協力しあって精神的のみならず、具体的に助けてゆくことが義務とされているだけでなく、それは当然なこととして積極的に遂行され、そこに喜びが感じられている。前科というような嫌な言葉も、そのような差別的な目も全然なく、資本主義国の根深い差別意識は考えることもできないということであるが、このような事実にも、われわれの社会とは全然カケ離れた「精神」の新しい型が、既にはっきりと板について生まれていることを示していると思う。

ところでこのような「精神」というものは、「宗教」が……そして「倫理学」が、古くより人民に説き要求していたものの具体化ともいえるのではないだろうか……。それが〝全体は一人のために……一人は全体のためにつくす……〟あたりまえのことになっているということの中に、しかもそのことが具体的な法的、経済

的その他の諸条件によっても、確実に保証されているということは、今までの世界では考えられなかったことである。そして、将来の世界の課題として大きな興味をもって考えられるのは、〝このような「新しい精神の型」の成長、発展と「宗教の教え」がどのように結びつくことができるか〟という問題であるが、それはそれとして今後の世界、日本の動きの変化を想うとき、実際いろいろな点で深く考えさせられるところがある。要するに、日本人は世界の流れを正しく把んで、その独自性を生かした「新しい道」を切り開いてゆくことが、今後ますます重大なさしせまった課題となってくるに相違ない……日本の伝統……そして宗教意識が……どのように生かされ、説かれねばならないかということは、社会科学の法則の確実な適用と共に具体的に把握されていなければ、人民の現実と意識と心性（情性）のくい違いが、歴史の発展と共に大きな矛盾となって、発展の流れをそれだけ内深くブレーキをかけるものとなるであろうし、反対にそれが深く拡く統一されればされる程、飛躍的なエネルギー、智慧となって、日本の躍進を最大限に促進するものとなるはずである。

以上の意味もこめて、日本の指導者とか現実を観るとき、つくづくとこれでよいのか……と思わずにはおれない。U2型事件、頂上会談の決裂その他の諸条件は、確かに国際情勢の悪化、対立の激化をもたらしているが、しかし西欧陣営と共産陣営の対応の仕方は根本的に異っておりその見透しの相違も質的に異っていて、（今日のソ連6・15）そこに体制の本質と科学的予測の度合と確信がはっきりと感じられる。いずれにしても、現圧の矛盾の激化の諸条件を分析し、新しい段階に突入した東西の諸条件を分析し、その統一を深くみつめてゆくとき、そこに一筋の線（過程）が浮きぼりされ、発展的な様相が具体的に次第に示しだされる、その前線に既に達していること——すなわち従来の対立の状態の様相が根本的に崩れ、その転換と共に矛盾の様相、地位が質的に変化するための……決定的な『新段階』を生みだすところの「矛盾の激化」に他ならないこと——が深く理解される。この数年間は世界を質的に、そして方向的に具体的に変える歴史的な時機にさいし、日本人民と指導者の〝先覚の目、対応の内容〟如何が

日本の将来の発展の度合とその国際的地位を、この時機に確定的なものとすることになろう……。

×××

エドワード・レーシー氏より教学院、宣教部に来た書簡抜萃（六月十三日付）

こちらはヒューストン市（テキサス州）の暑熱はきびしく水銀は一〇三度に上がっています。悪魔かとかげに生まれついていればともかく、これではとてもやりきれません。パン焼釜の中にいるようで、これというのも、前生からのカーマ（業）で何かのつぐのいをさされているのかとかこちつつあえいでいます。

さてこの前お知らせしました米国宗教事情の中で、米国キリスト教は一五〇〇―二〇〇〇の宗派があると書きましたが、これはまだまだ小派分立をしてゆくようです。今年上半期だけをみてもヒューストンにいる黒人間に三つの宗派が出来ています各派は二〇〇―三〇〇人ぐらいのメンバーですけれど。このほかに、この前に書きませんでしたが心霊主義者の会合があります。私はこれらの人々にも大本の冊子を読んでもらうようにしています。

先日ある霊覚をもった婦人（黒人）がこんなことをいっていました。「私は神さまから、いま米国では真理の半分しか知らされていない。全部の真理は日本から知らされる時がくるときかされている。もしかしたら、大本ではなかろうか」と。こんな訳ですから、これらの人々に対しても特に大本が発言されましたら、その発言は非常な重みをもって迎えられることと信じます。……（以下略）

教学院通報

教学院嘱託の篠原義雄氏は亀岡天恩郷に滞在中、三月二日午後二時、脳溢血のため急逝された。氏は月に一回、東京から来苑され一週間前後滞在し、大本教学の体系化に尽力されていたが、その研究なかばで急逝されたことは、惜しまれてならない。

○大本七十周年史編纂会事務局がみずほ会館内に設けられて、木庭次守、山本荻江、橋本泉の三氏がその仕事に専任するため出向し、その代りに大崎勝夫、花園繁、東郷富規子の三氏が教学院に来ることになった。

○土井靖都氏の「大本の天職、使命」というプリントが、地方の某氏から全国に配布されたが、あのプリントの内容は教学院の見解ではなくして、土井氏一個人の見解であるから、誤解のないようにしていただきたい。

大本神諭と一つの主権について

「大本神諭と文化の諸問題」と題して大伴正清氏は大正十二年二月二十五日号「神の国」誌上に、次のような記事を掲載している。

国際連盟と主権の統一

近刊書、エッチ・ヂ・ウエルズの「文化の聖書」中に痛快な所説が掲げられて居る。ウエルズ氏は、言う迄もなく現代有数の思想家であり、社会改造論者であり、科学者であり、小説家であり、時事評論家である。彼は英国が産んだ現代の誇りである。彼は国際連盟と世界各国の主権に就いて斯う言っている。

× ×

「若し人が確りと考えるならば、主権を一に合併せずして世界を制御する事が出来ようとは思われない……若し人類を破滅から救おうとするならば、一の世界的の制御がなければならぬ。一の世界的制御とは一の世界的の政府を意味するのである。世界的政府とは単に世界的制御の異名に過ぎない。そして、その政府は英国海軍に優越した海軍、仏国砲兵に優越した砲兵、現存の航空隊に優越した航空隊等を備えねばならぬ。多数の旗の代りに一の主権者の旗がなくてはならぬ。即ち打して一丸とした世界である。其の点まで行かなければ世界を制御するという事も馬鹿気ているであろう云々」

ここまで彼の所説を読んで来た私は、急に大本神諭が書きたくなった。

「お照しは一体、七王も八王も王が世界に在れば、此世に口舌が絶えんから一の王で治める経綸が致してあるぞよ」と。

× ×

日本の現代の智識階級の人達が、社会改造論者達が師父として仰いでいる彼ウエルズ氏に、此神言一句だけでよろしいそれを知らして欲しい。彼は、我賢明なる日本国民の大部分の如く矢張り大本神諭を迷信邪教の世迷言と嘲罵し得る勇気と低能さとを持っているであろうかどうか知ら？

（註、大本の文献で〝世界政府〟という言葉が使われたのは、この文章が初めである）

編集後記

▽大本という一つの教団の信徒が同じ教をうけているのであるから、大体同一のことを信じているように思われるが、さて実際にあたって話し合ってみると、こうもヒラキがあるものかと驚くようなことがしばしばある。理解のし方というか受けとり方というか、大きな差異があるものである。一つの宗教がいろいろな宗派に分れてゆくのも、ムリはないなと思われる。

▽大本の基本思想である〝立替立直し〟の思想についても、開教六十八年になるのに必ずしも統一されているとはいえない。こうした問題も、漸次検討し整理してゆかねばならないが、本号にはそれができなかったので、次号にはその基本問題にふれてゆきたいと思っている。

▽出口うちまる氏の「大本の宇宙観」は大本教義を知る上において心得ておかねばならぬ、基本的な教義であるから、ここに掲げた。

▽木庭氏の「神定聖地の神殿造営の意義」は、神定聖地における神殿建設について大本文献の上より述べたものであるが、七十周年を機会として綾部に大神殿が建設されるもののように早合点している信者もあるが、決してそういうものではない。まだそうした段階に来ているのではない。この文章の見出しだけを読んで早合点せず、筆者の意とするところを理解してほしいのである。

▽「神国の世」は篠原義雄氏の遺稿であるが、創刊号の「大本史観について」の筆者喜多哲良氏も、篠原氏のペンネームである。

▽佐々木のぼる氏の「『巨旦、蘇民』両将来の古記述が意味するもの」は、独特な研究論文である。ただここで断っておかなければならぬのは、氏はマルキストで大本信者というわけではないが、最近、大本の教と真剣にとっ組んであらゆる角度から研究している人である。特に興味深く感ぜられるのは、大本の教義が唯物論的態度と結びつくものであると氏が観ている点である。

▽本誌の編集事務は一さい花園繁氏の手を煩わした。

（桜井）

昭和三十五年八月一日　印刷
昭和三十五年八月七日　発行
「大本教学」第二号
（非売品）
編集兼発行者　桜井重雄
印刷者　土居重夫
発行所　大本教学院
京都府亀岡市天恩郷